令和５年度　卒業論文

# 町柄観察
# －新潟市古町通を覗き視る－

長岡造形大学　造形学部　建築環境デザイン学科
津村泰範研究室

202038　高野瑞子
提出日　２月１日

目次

**第１部　研究について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1**

第１章　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第２章　研究目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第３章　定義・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第４章　研究方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

第５章　研究対象・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
▷1　実施日程・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
▷2　実施内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
▷3　範囲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10
▷4　結果と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

**第２部　歴史調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11**

第１章　歴史のうえの町柄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

第２章　花街、古町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

第３章　湊町新潟・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
▷1　明暦移転・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
▷2　町割りについて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
▷3　東堀・西堀・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
▷4　小路・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
▷5　古町通・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
▷6　新潟の花街・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
▷7　古町花街・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
▷8　はなまち、古町(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
▷9　はなまち、古町(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

▷10　ひらく、うごく・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
▷11　はな（やかな）まち、古町へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
▷12　あがり、さがり(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
▷13　あがり、さがり(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
▷14　個と集団について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

第 4 章　歴史の層と町柄について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

**第 3 部　町柄調査実験・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31**

第 1 章　調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
▷1　古町通の【偏見】とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
▷2　古町通の【理想】とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31
▷3　古町通の【不満】とは・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

第 2 章　実験方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
▷1　実施場所・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

第 3 章　調査結果概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
▷1　設問 1・古町親密度回答結果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
▷2　設問 2・「古町」でイメージする範囲回答結果　・・・・・・・・・・・・・・・37

第 4 章　結果の分析と考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

第 5 章　人物像の共通点による分類・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
▷1　サラリーマン・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
▷2　イケオジ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・42
▷3　ショートカットのお姉さん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
▷4　マフラー・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
▷5　古風なおじさま(1)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
▷6　温故知新・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・46
▷7　古風なおじさま(2)・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・47
▷8　リッチな女性・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・48
▷9　古町について考える人達・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・49
▷10　古町通の人付き合いについて考える人達・・・・・・・・・・・・・・・・・50

▷11　年配の方々・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51
▷12　リーバイスのデニムパンツ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・53
▷13　ニット帽・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
▷14　古着・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56

第 6 章　【偏見】【理想】【不満】に該当する回答での分類・・・・・・・・・・・・・・58
▷1　偏見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・58
▷2　理想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
▷3　不満・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

**第 4 部　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63**

第 1 章　問題提起・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63

第 2 章　古町通の町柄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

第 3 章　結論及び町柄について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64

**参考文献**

## 第１部　研究について

### 第１章　はじめに

「古町」が好きだ。しかし、私は「古町」の「中の人」ではない。「古町」のまちづくりをよく知らないし、「古町」に住まいがあるわけでもない。せいぜい「古町」という場が新潟市にあることを知っていて、古町通に時々遊びに来たことがある程度であった。私が知っているのは、「古町」という場のほんの輪郭に過ぎない。しかし、その「古町」の輪郭が、私にはとても魅力的だったのだ。

好きな町というものがある人は、実は少なくはないと思っている。それは、その場との関わりの深さによって決まることもあれば、そうでない場合もある。「将来は〇〇に住みたい」「〇〇に別荘がもてたら最高」。そんな妄想をすることはなかろうか。詳しく知らない場でも、なぜか自分にとって魅力的に映っていることがあるのだ。詳しく知らない場所が、人々の目にそのように映っているとき、人々が見ているのはその町の輪郭である。
私はこの輪郭を「町柄」と名付けた。
本研究は、私の目に魅力的に映る輪郭をもった場、「古町」の町柄を研究したものである。

### 第２章　研究目的

本研究では、先に述べたように、私にとって魅力的な輪郭をもった場、「古町」の町柄を調査すること、また、調査にあたり「町柄」の定義づけと理論の確立、調査の方法論の確立を目的とする。

本研究は、社会的な意義や役割はあまり大きくないだろう。私自身の興味や趣味嗜好から始まり、それを明らかにする、ということが目的の大部分を占めている。しかし、「町柄」の定義づけや理論、調査の方法論の確立は、文化財や古い建物の活用、まちづくりを考えるうえで、役立つ事象にもなりうると考える。これを踏まえて、まずは本研究の目指すところ、意義について説明したい。
第一に、「町柄」を考えるということは、客観を考えるということでもある。物事を考えるとき、人はどうしても主観に引っ張られてしまうところがある。考えているのは自分の脳であるから、仕方がないともいえる。しかし、ときとして客観は、物事に取り組む際にとても重要な要素になる。建築という分野に限った話で言えば、古い建物の活用や、まちづくりにあたるのではないかと感じた。まちづくりは、町全体のブランディングでもあり、多くの客観が求められることはイメージがつくだろう。一方、古い建物の活用を考えるとき、しばしば観光や商業についての観点が求められることはイメージがつくだろうか。リノベーショ

ンカフェやレストラン、ホテルなどがその例である。町に古くからある物は、どうしてもまちづくりの話から逃れられない。観光や商業についての観点が求められることは、それゆえと言える。そうなると、古い建物の活用を考える際にも、客観は大事な要素であると言える。以上より、「町柄」の概念や定義、並びに方法論を考察することは、これらを考える際にも役立てることができると言える。また、役立てることができるように、まとめ上げることを目指す。
同様に、しばしばまちづくりを行う際、「内輪ノリ」が発生することがあるような気がしている。その内輪の勢いや推進力は、まちづくりをするうえで重要な役目を担うこともあるが、正しく客観的視点をもつことが、難しくなる危険性も秘めている。「町柄」を求めることは、客観的視点を得る方法を求めることにもなり得るだけでなく、その方法論はこのような場面でも活用できるようにまとめたい。これらは本研究の意義にもなり得るだろう。

## 第 3 章　定義

はじめに、本研究で扱う町柄というものについて、この時点での大まかな定義づけを行おうと思う。
前提に、町柄とは、人柄を町に当てはめた造語であり、オリジナルの概念である。先に述べたように、町柄とは、その町の輪郭である。これは、その町の本来の住人、建物、まちづくりの方針、町は町を構成する様々な要素を持っているであろうが、それら一つ一つの事実に言及するものではない。それら様々な要素を総括しつつも、より、もっと、曖昧なものである。だからこそここでは、輪郭という言葉を使用した。
町とはそもそも生き物ではなかろうか。どれほど計画しても、統制しても、同じ町は生まれないし、今後の予測もできない。これはとても人間的だと感じる。そして、人には固有の「イメージ」がある。そのイメージは、印象とはまた違って、より偏見や、その人に対する理想みたいなものが多分に含まれているものだと感じる。「この人にはこういうところがありそうだ」と、一方が決めつけるものがそのイメージであるとして、それはその人の身なりや、しゃべり方、噂話、身振り手振りや目の印象などから判断するであろう。これはその人の輪郭である。これらイメージを決定づけるその人の輪郭は、その人の趣味嗜好、家庭環境、過去の出来事などの要素が影響して形成されているような気がしている。ここではその「イメージ」をその人の「柄」として、町で考える。町にも同様、偏見や理想、もしくは不満などが含まれた「イメージ」が存在するであろう。町柄を考える際、まずは町でも同様に、町のもつ固有の「イメージ」と、「イメージを決定づける要素」とを考える必要がある。まず、先に述べたように、町のもつ固有の「イメージ」、またはその町の「輪郭」は、町に対する偏見、理想、不満などが包括されたものであることが条件であり、そうすることで町柄と同義となることとする。次に、「イメージを決定づける要素」とは、「町に既にある客観的事実」を指すこととする。それはその町がこれまでに積み上げてきた歴史のほか、都市計画上の役

割、土地の値段など、数値や文字で可視化されている周知の事実を指す。
以上より、現時点での町柄の定義は、「客観的事実、または周知の事実によって決定づけられた、その町の偏見、理想、不満を包括したもの」とする。

## 第 4 章　研究方法

現時点での町柄の定義より、本研究は、二つの軸によって進めることとする。一つは、「古町」の客観的事実、周知の事実の調査、二つ目に、「古町」の偏見、理想、不満の調査である。それぞれ、具体的に説明を加える。
まず、「古町」の客観的事実、周知の事実の調査では、①歴史の調査　②都市計画上、行政のうえでの役割や関わりのある組織の有無 を主として文献を通して行う。
次に、「古町」の偏見、理想、不満の調査では、ある一つの実験と、その考察を行う。実験の内容、詳細については後述する。

## 第 5 章　研究対象

町柄は、〇〇町はこう、××町はこう、と決められた町の区切りに呼応するものではないだろう。町柄には、町名や丁堺などの区分とは異なった町柄独特の区切りが存在するものだと考えている。そしてそれは、研究により明らかになる事柄の一つであろう。よって、今回研究を進めるにあたって、中心とする研究対象範囲を大まかに定義するが、それは調査によって変化する可能性のあるものとする。

以上を踏まえ、はじめに、中心とする研究対象範囲として、「古町」の町柄の区切りを考える。まず、「古町」とは「古町地区・古町エリア」であり、町名の区切りで見ると、いくつかの町を含む。白山神社から延びる古町通に加え、その左右に位置する西堀通、東堀通、本町通などがあるが、今回はそのうちの古町通を、中心とする研究範囲とする。以下に理由を二つ示す。一つは、古町地区・古町エリアにおいて、その名を冠する古町通は、古町地区・古町エリアにおいて重要な存在であると考えるから、二つ目に「古町に行く」とは「古町通に行く」ことを指していたこと、その際にみていた「古町」の輪郭に魅力を感じていたという自身の経験から、今回調査したい町柄は、古町通の町柄であると判断したからである。
次に、古町通のなかでも、どの部分を、中心とする研究範囲とするのかを考える。ここでは、一度まち歩きを行い、自身の体感を調査・整理することとした。以下にその結果と考察を示す。

【古町通まち歩き】

実施日程：2023 年 7 月 15 日　土曜日
夕方 16 時から 18 時
晴れ　蒸し暑い日

実施内容：古町通を歩き、感じたことを地図にメモする
目についたところは写真撮影

持ち物　：iPad（グーグルマップを表示して描きこむ）

範囲　　：上古町から古町 10 番町まで

▷1　実施日程
古町通の道路を挟んで先端にある、白山神社にて白山祭りが行われている最中であった。白山神社の夏祭りは 7 月 12 日水曜日から、月曜祝日の三連休を間に挟み、7 月 18 日火曜日まで開催されており、それに伴って、古町通も人通りの多い日であった。通常時ではなかったが、通りの賑わいからは、元より「古町にいた人」ではなく「古町に来た人」が、どこまでを古町通と認識して歩くのか、を調査することができた。

▷2　実施内容
古町通を歩きながら、iPad に地図の切り抜きを表示し、そこに直接感じたことを記入した。地図はグーグルマップをスクリーンショットしたものを使用した。書き込みがしやすい・見やすい範囲で区切ったため、地図の区切りに大きな意味はない。以下はその際に使用した、メモした地図を編集したものである。当日は地図に手書きでメモをしていたが、文字が見にくいため改めて活字で打ち直したものであり、内容はそのまま打ち込んでいる。

古町通 1～2 番町

古町通 2～3 番町

古町通 3～4 番町

古町通 5 番町

古町通 5～6 番町

古町通 6～7 番町

古町通 7 番町

古町通 8 番町

古町通 9 番町

古町通 10 番町

▷3　範囲

はじめは、どこまで歩くとは明確に決めずに歩いた。私自身の目安としては、古町通＝アーケード街の印象があったため、「アーケード街が終わっているな」と自身が感じるところまで歩くこととした。結果として、古町通 1 番町から 10 番町まで歩いた。

▷4　結果と考察

結果、古町通の町柄として、研究対象に含めたいと考えた範囲は、古町通 1 番町から古町通 9 番町までとした。9 番町からそれ以降にかけて、商業地か、住宅地かという違いが出てくるが、アーケード街自体は 10 番町までは続いていると感じ、11 番町からはアーケードが途切れたり、住宅地の様相が目立ってきているように感じた。そのため、まち歩き自体は古町通 10 番町まで行ったが、結果研究対象に含めたいと考えたのは古町通 9 番町までであった。書き込んだ地図を見ても分かるように、古町 1 番町から 9 番町にかける中でも町の様子に差を感じている部分はある。例として、6 番町から 7 番町にかけてのところでは「急にかたい感じ」と記されていたり、7 番町から 8 番町にかけてのところでは「多少夜っぽくなる」と記されていることなどが挙げられるほか、古町通 1 番町から 4 番町にかけては「上古町」と呼ばれる枠組みがあったりする。しかし、古町通という商業地は 9 番町まで続いていたこと、白山祭り開催下で、「古町に来た人」がいる中、古町通 9 番町まではその人通りや賑わいが感じられたことなどから、古町通 1 番町から古町通 9 番町までを今回中心とする研究対象範囲とする。

## 第２部　歴史調査

### 第１章　歴史のうえの町柄

町柄を考えるうえで、歴史に目を向ける意義とは何であろうか。そもそも、歴史の存在意義とは何であろうか。「未来に生かすため」、「同じ失敗をしないよう、教訓とするため」など、様々あるだろうが、私は他者の歴史や過去について、「そのものを知るため」のコンテンツであると思っている。
ひとまず、人間で考えてみよう。私達が、自身の過去について、先に述べたように「次に生かそう」「教訓としよう」という意識があるとすると、これまでがすべてではないと言っても、私達の思考や行動には、過去が影響していることになる。その人がもつ過去は、一人一人によって違うものであろうし、過去は「個性」を形成する大きな一つの要素であると捉えることができる。
これは、町でも同じことが言えると思う。歴史的な町並みが残っているところでは、考えやすいだろう。農村であったところでは、大きな豪農の家が残り、一つ一つの土地の区分けが大きかったりする。一方で、城下町であったところでは、城があったところを起点に、整然とした道路や土地の区分けがされていたり、職業ごとに町が分けられ、各々に特徴的な老舗が立ち並んでいたりするかもしれない。しかしこれは、歴史的な町並みが残っているか否かに関わらず、どの町にも平等に存在する「個性」である。意図的に保存された町並みでは、視覚的にわかりやすいだろうが、本来は、都会も田舎も、観光地であるか否かも、関係なく過去が影響して形成された「個性」があるはずだ。都会と田舎の中間くらいの規模の町で、観光地でもない、私が生活をしてきた新潟県長岡市の駅近辺には、歴史的な町並みや建物はあまり見受けられないが、それは戦争による空襲で町が焼けたという過去があるからだ。この歴史が、「歴史的な建物がない」という「個性」をもった町を形成している。この事実が、現在の町にも影響していることは確かで、老舗よりも新しい店舗や、老舗でも、新しくもないが古い店などが立ち並んでいたりする。そうなると「新しい店がよくできているよね」だったり「ボロい建物が多いよね」（すたれているよね）などと言われたりする。ちなみにだが、歴史的な建物についてはあまり「ボロい」とは表現されていないと感じるので、ここで言われる「ボロい」は、新しくも古くもない建物群を少しマイナスな表現で言われている。これらの事柄は、町のイメージに影響を与えているだろう。
ここでもう一度、はじめの町柄の定義を振り返る。現時点で私は、町柄を「客観的事実、または周知の事実によって決定づけられた、その町の偏見、理想、不満を包括したもの」とした。これに基づくと、歴史は、「客観的事実、または周知の事実」に該当し、「町のイメージを決定づけるもの」に該当する。一方で、歴史は「客観的事実」ではあるが必ずしも「周知の事実」であるとは限らない。とある一つの出来事を知っているか否かで、イメージが変わってくる可能性も考えられる。ＡとＢというイメージがあったときに、Ａは、ａという出来

事が印象的であるがゆえのイメージである、とその A というイメージに説明をつけることができる。このことから、町柄を考えるうえで、歴史は重要であると判断し、調査を行うこととした。

## 第 2 章　花街、古町

※本タイトルの古町とは、主に古町通と、古町花街を指す。
新潟市古町地区には、印象的な町並みがある。道路が石畳で舗装され、風格のある建築物が立ち並んだ、古町花街と呼ばれるエリアである。ここを中心に活動している団体が、「古町芸妓」である。ここではいくつかの料亭や待合が並び、登録有形文化財に登録された「鍋茶屋」は、ひときわの存在感を放っている。古町通 8 番町から狭い路地を通って訪れるそこは、特別感があってとても魅力的だ。

（資料 1）古町花街の写真（自分で撮影したもの）

この古町花街は、古町通の歴史を知る上で外せない存在であろうと予想し、わたしは古町花街に注目して歴史を調査することとした。
よってはじめに、古町通と、古町花街に注目して作成した年表を、以下に示す。

| 年代 | 出来事 |
| --- | --- |
| 江戸中期 | 起源 |
| 宝暦（1751～1763） | 花街が延長 |
| 天保14（1843） | 新潟上知 |
| 弘化3(1846) | 鍋茶屋誕生 |
| 安政6（1859） | 大火により、片原通（東堀通）、古町通の間にあった下水堀が埋め立てられ、通行可能となる（後の8番町東新道と推測） |
| 明治1（1869） | 新潟港開港 |
| 明治3（1870） | 「越後新潟全図」発行 |
| 明治5（1872） | 新潟県令楠本正隆による町並みの整備が開始 |
| | 貸座敷の営業許可区域を限定 |
| 明治6（1873） | 新潟県令楠本正隆による町並みの拡大、改造が本格的に開始 |
| 明治7（1874） | 貸座敷芸妓遊女規則 |
| 明治10（1877） | 細身案内図絵　新潟美知の技折　刊行 |
| 明治13（1880） | 貸座敷及娼妓取締規則 |
| 明治17（1884） | 6番町に勧商場（小売業者が集まった百貨店のような場）の設立 |
| 明治21（1888） | 古町通内でわずかに許可区域が広がる |
| | 古町4番通火災 |
| | 遊郭統合開始 |
| | 貸座敷の許可区域改正 |
| 明治26（1893） | 古町通8.9番通り中心とする一画が火災 |
| | 貸座敷の許可区域改正 |
| | 8番町側西新道が一部を除き開通 |
| 明治29（1896） | 9番町側東西新道開通（仮） |
| 明治29（1896） | 新潟市商業家明細全図　刊行 |
| 明治31（1898） | 本町14番町の新潟遊廊に妓楼を集結 |
| 明治31（1898） | 貸座敷の許可区域改正完了（遊郭統合完了） |
| 明治34（1901） | 料理屋・待合の取り締まり規則が施行 |
| | 「新潟市全図」発行 |
| 明治38（1905） | 8番町側西新道焼け残り箇所の開通 |
| 明治41（1908） | 古町通8.9番町にて火災 |
| | 古町通8.9番通り新道が全通完了 |
| | 古町通3番町より火災 |
| 明治42（1909） | 市区改正新潟市全図　附実業家案内刊行 |
| | 三業組合の結成 |

| | |
|---|---|
| 大正3（1914） | 古町8番町に大竹座（映画館）オープン |
| | 古町6番町に電気館（映画館）オープン |
| 大正6（1917） | 鍵三銀行が古町通2番町に新築移転 |
| 昭和3（1928） | 映画館新潟松竹が古町通5番町に開業 |
| 昭和6（1931） | 新潟ビルディングが古町通6番町に開業 |
| 昭和12（1937） | 日中戦争 |
| | 万代百貨店（現大和新潟店）、小林百貨店（現新潟三越）オープン |
| 昭和13（1938） | 国家総動員法公布 |
| 昭和16（1941） | 太平洋戦争 |
| 昭和30（1955） | 新潟大火2 |
| | 中央商店街協組が古町7.8.9番町に新潟で初めての近代的アーケードを建設 |
| 昭和33（1958） | 新潟駅が移転開業 |
| 昭和35（1960） | 古町5番町商店街のアーケード完成 |
| 昭和39（1964） | 新潟国体が開催され、堀の埋め立てが完了 |
| | 新潟地震 |
| 昭和44（1969） | 緑屋新潟店が古町通7番町に開店 |
| 昭和45（46）（1970/1971） | 古町通7番町のオーバーアーケード竣工 |
| 昭和48（1973） | 万代シティが誕生 |
| 昭和51（1976） | 西堀ローサが開業 |
| 昭和53（1978） | カミーノ古町が開業 |
| 昭和55（1980） | 小林百貨店が新潟三越に改名 |
| 昭和60（1985） | 古町通6.7番町の古町モールが完成する |
| 昭和62（1987） | 柳都振興株式会社設立 |
| 平成5（1993） | 柳都振興株式会社設立 |
| 平成12（2000） | 柳都振興後援会設立 |

（資料 2）古町通・古町花街歴史年表（自分で作成したもの）

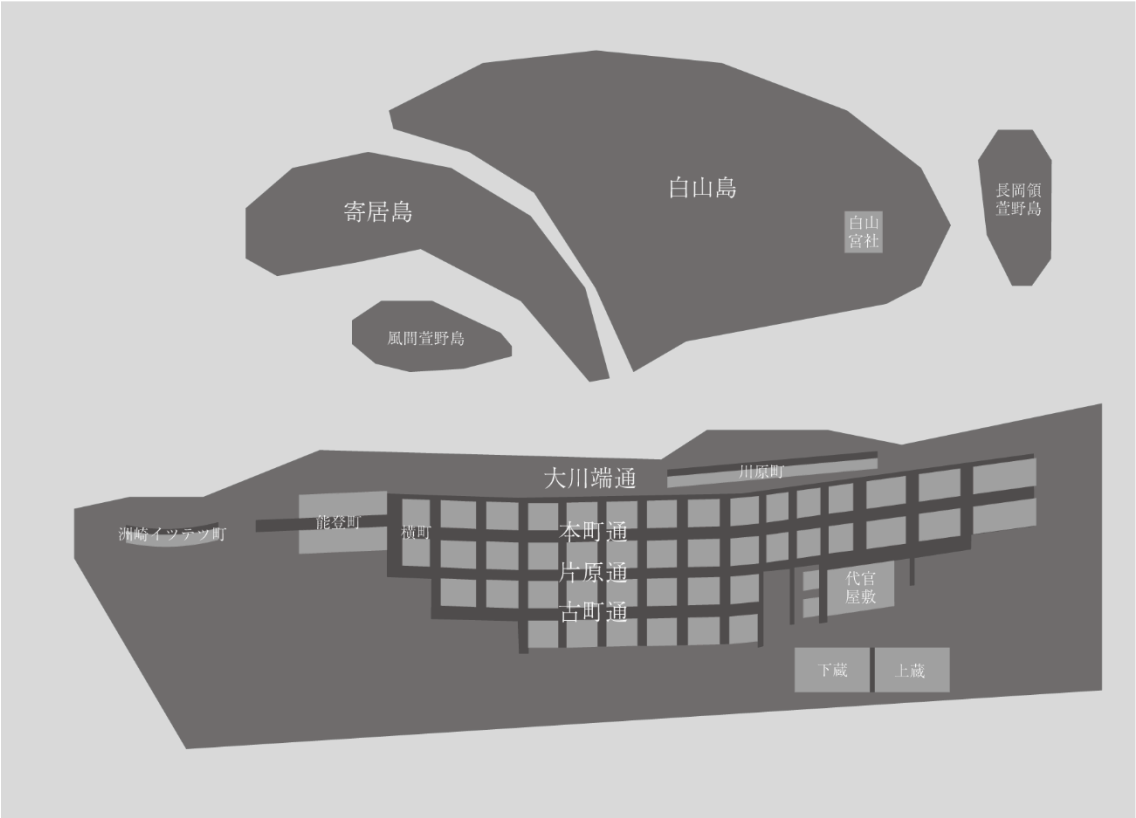
## 第 3 章　湊町新潟

▷1　明暦移転

先に例として、農村や城下町の町の構造について少し触れたが、それでいうとかつての新潟市は、湊町であった。ここでは、湊町新潟の始まりと、その構造について記す。

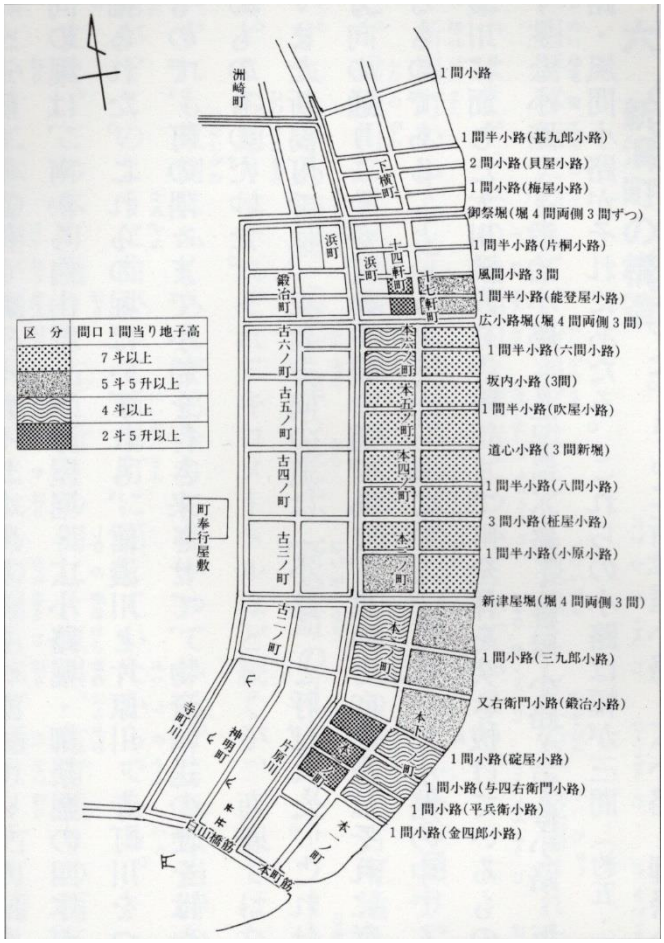
日本有数の大河川である信濃川を持つ新潟は、古くからその歴史を信濃川に左右され、現在

の新潟市の始まりも、信濃川が影響していた。現在の新潟市の中心部は、明暦以前、別の土地にあった。これを古新潟町という。以下に地図を示す。




（資料 3）古新潟町図　（新潟市・新潟市史通史編 1）

寛永 15（1638）年、長岡藩主牧野忠成は、新発田藩主に新潟町の移転を懇願する書状を送った。その中で、「信濃川の流れが変わり、新潟の町民は殊の外迷惑している。自分の代に新潟町がつぶれるようなことは何としても避けたいので、もよりの島へ町を移したい」（新潟市史通史編 1 より引用）と記していたという。このころ信濃川は、阿賀野川と合流したことにより、川の流れが変わり、そのことが古新潟町の湊に影響を及ぼしていた。新潟町は、古新潟町から、地図にも表れている寄居・白山島へ移転し、そこが現在の新潟市の中心部となっている。以下に移転後の新潟町が分かる資料を示す。




（資料 4）明暦 2 年ごろの新潟町（新潟市通史編 1）

資料 3、資料 4 からも分かるように、古新潟町と、寄居・白山島へと移転した新潟町では、町割りに大きな変化はない。後述するように、小さな変化はなされ、より整然とした町に整えられてはいったが、改革するような変更は行われなかった。これは意図的なことであり、町の移転の際には、古新潟町の町割りを崩さないことが原則とされていた。このことより、古新潟町の町の構造や、土地、地盤等に大きな問題はなく、古新潟町が移転することとなった原因は、信濃川の流れの変化で、湊の機能が衰えたことにあると分かる。この出来事は「明暦移転」と呼ばれ、承応 3（1654）年に開始、明暦元（1655）年に完了した。ここまでが現在の新潟市中心部、および現在の古町通のはじまりである。湊町として、信濃川の影響を受けてはじまったこの場所は、今後も港町として歴史を紡ぎ、また信濃川の影響を受け続けながら、歴史をつなげていくこととなる。

▷2　町割りについて

次に、このころの新潟町の町割りと、今現在の同地点の町割りについて説明をつける。以下に今現在の新潟市古町地区周辺の地図を示す。

（資料 5）現在の新潟市古町地区（見やすい地図を探す）

資料 4、5 を見ても分かるように、このころの新潟町と、現在の同地点、新潟市古町地区では、町割りの基本は大きく変わっていないが、一つ、ひときわ目立つ違いがある。堀の有無である。堀については、ここでは深く触れないが、地図上でみえる変化よりも、現実でみた、堀のある町の風景と堀のなくなった風景では、軽くショッキングなほどの違いがあるだろう。

町割りに話を戻す。新しい新潟町は、信濃川に沿うようにして、平行に大きな「通り」がくるように設置された。信濃川に近い東側を本町通、少し離れた西側が古町通である。また、古町通の先端、白山神社の側には、古新潟町時代の川原町が移され、神明町と改称された。これら南北に延びる街路が「通り」、そしてそれらと交差するように東西に延びる街路が、「小路」と呼ばれた。このころ「通り」には店が立ち並び、「小路」には店は一切なく、「通

り」を結ぶ横道として機能していた。（新潟市史通史編 1 より引用）このことも現在との違いのひとつではあるだろう。（資料 6，7 参照）

（資料 6）現在の古町通（自分で撮影）

（資料 7）現在の鍛冶小路（自分で撮影）

そして、これらは違いである一方、現在とのつながりとも解釈できる。現在の古町通、本町通を見てみると、それぞれ「古町通商店街」、「本町通商店街」が存在する一方、「小路」は全体として交通路としての機能が大きい。それは、新潟市全体のつくりからも交通路として有用な位置にあるからであろう。まさしく二つの店が立ち並ぶ「通り」を、「小路」がつなげている。町の基本構造として、このころから、現在までつながっている事実の一つである。

▷3　東堀・西堀

また、資料 5 から、通りについてみてみると、本町通、古町通のほかに東堀通、西堀通があることがわかる。これら二つの通りは、本町通、古町通と比べて交通が活発である。（資料 8，9 参照）

（資料 8）現在の東堀通（自分で撮影したもの）（資料 9）現在の西堀通（自分で撮影したもの）

これら二つの通りは、名前の通りかつては堀であり、交通の要所の一つであった。それぞれ片原川（東堀）、寺町川（西堀）と呼ばれ、明治時代に東堀、西堀と改名された。昭和 30（1955）年の新潟大火後に東堀、昭和 39（1964）年までに西堀が埋め立てられるまで、これらは舗装された道路ではなく堀として水が流れていた。このことはよかったのか、悪かったのか。あなたの心象はどうだろう。

▷4　小路

先述した「小路」について説明を加える。「小路」は、小さい路とは書くものの、決して路地のような細い道であったというわけではない。先にも述べたように、各「通り」をつなげるような、交通路の役割を持つことができるような街路なのである。特に信濃川の側から寺町堀の側まで突き抜けていた小路は主要であり、それぞれ南側から鍛冶小路、柾谷小路、道心小路、坂内小路、風間小路が該当する。これらの小路は幅が 3 間（約 5.4 メートルほど）あり広かったという。

▷5　古町通

明暦（1600 年）ごろから、日本海側から下関を通り大阪へまわる、「西廻り航路」が発達し、新潟に到来する船は増加、新潟湊と町は発展した。このころ湊で扱われていたものを見てみると、新潟湊からは米（年貢米）、新潟湊へは木綿・古手（古着）類が多くもたらされており、その額は 25000 両、次いで西塩、能登塩が 23000 両であった。これは、木綿の原料である綿花の栽培が、寒い地域では困難であったことに由来する結果だと考えられている。このころ新潟湊は、この西回り航路によって全国的な流通の拠点へと上り詰め、元禄 9（1696）年には入湊総数が 3500 艘と、長い江戸時代を通じて最大の数値であった。

これにあわせて新潟の町も発展するようになるが、古町通はどのようであったのだろうか、見ていこうと思う。

資料 3 の新潟町の地図をもう一度見てみよう。この地図は、地子（地子とは、この時代の地価のようなもの。）の分布を表示しており、古町通は低く、信濃川に近い本町通の側ほど高いことが分かる。地子は、高い場所ほど繁栄しており、その数値によって町の賑わいを推測できる。このことから、新潟の商売、及び経済活動において信濃川に近いということは、大きなアドバンテージとなることが分かる。この地子の高い本町通二ノ町（現 5 番町）から十七軒町（現 10 番町）は「表店」と呼ばれ、この中央部は最も地子の高いところであった。この表店のエリアがこのころのメインストリートであったのであろう。一方、古町通は本町通よりも古くからある町であったが、衰退し、その陰に隠れた存在であったともいえる。

ここで、町の商売から町を見ていこうと思う。江戸時代の商工業は、全くの自由営業ではなく、藩などによって規制が設けられていることが一般的（港町新潟に伝承する文化・芸能の歴史的資料より引用）であり、新潟町も例にもれず規制が設けられていた。業種によって営業可能な地域を限定する制度があり、これを「町座」という。先に述べた「表店」は、この一種である。本町通二ノ町から十七軒町（現在の本町通五番町から十番町）を「表店」、大川前通下一ノ町から横町（現在の上大川前通 4 から 12 番町）を「他門店」、古町通四ノ町（現在の古町通 7 番町）を「紙店・塗物店」、古町通二ノ町・三ノ町（現在の古町通五 5・6 番町）を「旅籠町」、その他材木町や肴町といった町座が新潟町には存在した。これらはそれぞれ規制によって、専売特許が設けられていた形ではあったが、時代の変化によって新し

い品物や商売がでてくることは必然である。これらの特権は必ずしも揺らがない絶対のものではなかった。
古町通の町座についてみてみると、古町四ノ町（古町通 7 番町）は紙店・塗物店であり、その名の通り紙や塗物に対する特権を許されていたが、これはもともと古町のみで売られていた絹布や木綿類が、本町でも売られるようになってしまったために、藩に願って得た特権であると伝えられているという。しかしむなしくこの特権も徐々に制限され、表店での紙物の販売もみられるようになる。古町通二ノ町・三ノ町（古町通 5・6 番町）は旅籠町であり、こちらもその名の通り旅籠屋の営業に関して特権が認められていた。湊町の旅籠屋というと、さぞ船乗りでにぎわうのだろうと考えるが、この場はそうではなかった。このころ湊に多く出入りしていた、商人たちを泊めていた宿を、廻船問屋と言い、それらは古町通二ノ町・三ノ町には存在しなかった。この場に宿泊していた者は、船に乗ってやってくる商人ではなく、旅人と、裁判に関わる人達であった。ここでの旅籠屋は「公事宿」という役割をもち、新潟奉行所より言いつけられた裁判の証人や、取り調べの者が宿泊する施設でもあったという。
これらを考えると、江戸時代の古町通はあまり賑やか、華やかであるような印象は受けない。やはりどちらかというと、本町の陰に隠れた町というような気がしてくる。一方で、花街というものはこのころ以前から新潟町に存在しており、新潟湊が繁栄した元禄期には、当然花街も繁栄したであろうことが予測できる。私からすると、いわゆる物、商品以外のものを扱っていた古町は、一風変わった町の様子を想像してしまう。「メインストリート」というような、大衆的な華やかさはなくとも、別ベクトルの華やかさ・賑わいが、あったのではなかろうか。

▷6　新潟の花街
その別ベクトルの華やかさ・賑わいは、花街としての歴史を見てみることでより理解できるような気がする。しかし、明暦移転後の花街については、情報がまばらで確証のない事柄もある。文政ころまでは、いくつかの傍証から漠然としたことは分かるが、花街の位置や規模、妓楼の数や歌妓の人数などの詳細は、一切不明である（港町新潟に伝承する文化・芸能の歴史的資料より引用）という。よってここでは、各参考文献より得た情報を羅列しながら、自身の予想や推測を交えて考えをまとめたいと思う。
文政より以前の古町花街について、先にも少し触れたように、恐らく新潟湊が繁栄した元禄ころ、同様に花街も盛り上がりをみせたはずである。一方で、文政のころの遊女屋は、先述した花街を中心とはしていたものの、町中に分布していたという。新潟遊女考によると、「新潟中道は、二十年以前より衰退して、今は絶えたり（越後野志）」と記述されている。新潟中道とは、現在の古町通 3・4 番町付近を指すとされる。これは明治のころの文献であるので、「今」とは明治 38 年を指している。この「二十年以前」とは、文化・文政から天保あたりの時期を指すと推測されており、恐らくこの「中道」こそが新潟町ならびに古町花街の起

源であった。これは、文政以前の花街とは、新潟町全体にその役割や文化が広がったことによって、徐々にその役割をもつ町としては衰退していったということであろう。一方、その場では衰退したと言えるが、これはむしろ発展したといっても間違いではないかもしれない。文政以降、古町花街は場所を少し移して盛り上がりをみせることとなる。文政以降の、古町花街について詳しくみてみよう。

▷7　古町花街

続いてここからは、文政以降の古町花街について順番に見ていきたい。よってはじめに、古町花街をみることについての私の認識を、今一度整理しようと思う。このころの古町花街は、先述のように、文政以降も古町通四ノ町（古町通 7 番町）は塗物の町であったが、そこを除いて古町通二ノ町から六ノ町（古町通 5 番町から 9 番町）と、古鍛冶町（古町通 10 番町）までは歌妓を抱えた旅籠屋や妓楼が立ち並ぶ、古町花街となっていた。文政二年、新潟町には古町花街に加えて寺町花街・下町花街・嶋の花街の四つの花街が存在したが、歌妓の人数や旅籠屋・妓楼の数が最も多く、新潟町では最大の花街となっていることが分かるという。

（

今にもみられるように、古町通は花街としての賑わいではなく、商業地としての賑わいに舵をきることになる。しかし、このように以前からいわゆる「商業地」ではなく、花街や、旅籠町といった側面をもっていた古町は、やはり一風変わっていると思う。花街も、旅籠町も、印象としては親切だけどオープンではない。物を売っている商業地には物を売りさばく商人の力強さや万人に対する距離の近さのようなものを印象として感じるが、花街や旅籠屋はそうではない。サービスを親切に提供しつつも、距離の取り方がうまく、万人に対して距離が近いというよりは「内輪」が存在しそうな界隈である。力強さよりはしたたかさといった言葉のほうがしっくりくる。

これら古町花街は、徐々に花街としては衰退していくが、その衰退のスピードは限りなくゆっくりであるように思う。むしろ、先に提示した私の「まち歩き地図」では、古町通 8、9 番町にて「夜の町」だと感じているし、今なお古町花街は残っている。そして古町通には、商業地としての歴史ではなく、ここに述べたような歴史があることは、今後「古町」（ここでは、古町通の意）を見るうえで意識してみるといいかもしれない。「古町」についての主観が、少し整理できるように、私は感じている。

▷8　はなまち、古町(1)

前々章では、明暦移転から文政のころの古町花街の概要を述べたが、ここからはもう少し広く、文政以降、江戸後期の古町花街全体の流れを、記していこうと思う。

文政以降の古町花街は、賑わいと華やかさをもっていた。そもそも新潟町の花街文化は大規模なものであり、それが分かる資料が以下の「全国遊郭番付」である。

（資料 10）全国遊郭番付（新庄デジタルアーカイブ）

右上 3 番目に越後・新潟の記述があるのが分かる。これは、全国でも 3 番目の規模の遊郭のある町であることを示している。これは幕末ころの資料と推測されているというが、この当時京都の島原や、江戸の深川に次ぐ規模の花街があったというのは、相当なものであろう。先に述べたように特に「古町花街」の規模は新潟町最大であり、文政 2（1819）年ころの娼婦・娼家の数も多い。天保 1（1830）年ころには、古町五ノ町、六ノ町（古町通 8・9 番町）が特に繁盛していたという。この場を中心とした古町花街こそが、全国でも有数の花街を育て上げたのであろうと推測される。また、古町二ノ町・三ノ町（古町通 5・6 番町）も、魅力的な花街だと評判であったという。

▷9　はなまち、古町(2)

江戸後期、古町通は花街としても繁盛していたことが以上より推測されたが、その後はどうなっていくのかを見ていこうと思う。

はじめに、このころ花街で働く女性たちとはどのような人達を指すのかを、ここで一度整理しておく。ひとくちに妓女といっても、イメージする仕事は様々であろう。恐らく、それらのどのイメージも間違っていない。当時、妓女には 3 種類あった。「妓に三種あり、世俗色を売りて芸を売らざるもの、之を「小供衆」（今の娼妓）といひ、芸をひさぎて色をひさかざるもの、之を「町芸者」（今の芸妓）と謂ひ、色と芸とを剣舞するものを之を「歌舞遊女」

と謂ふ」（新潟遊女考より引用）とある。「色」とは体を売ること、「芸」とは歌や楽器、踊りをすることであり、当時は体のみを売る人、歌や楽器、踊りのみを行う人、体も売るし、歌や楽器、踊りも行う人がいたということである。このころ花街には、これらそれぞれを生業とした女性が混在して存在していた。明治期の古町花街では、幼い女の子を養子にとり、小学校 1 年生程度の年齢から、踊りや歌、楽器の技術を教え込むこともあったという。そうすることによって、言葉が悪いが、質の高い妓女というものを生み出しており、評判も高かったという。さながら、現代の芸能事務所の練習生のようである。
一方で、明治期には、これらの職業に対する規制が厳しくなり、取り締まりが行われた。（資料 2 の、年表の明治 5 年以降を参照）明治 15（1882）年には、歌舞遊女は廃止され、これらの人々は「芸」を売るか「色」を売るか選択しなければいけなくなった。そしてそれぞれの活動の場を分けられるようになる。明治 31（1898）年には遊郭統合が完了し、古町は完全な「芸妓の町」となる。この取り締まりが多く行われた明治期は、古町通において大きな転換期であったように思う。このころの古町通は、言葉のまま「町が動いた」時期であろう。このことについて、以下より詳細を記述していく。

▷10　ひらく、うごく
明治時代、古町通には大きな出来事が二点ある。うち一つは、そもそも新潟町にとっても最大の出来事、明治元年の新潟港の開港であろう。新潟は、鎖国を終えた日本の開港五港（横浜・函館・長崎・神戸・新潟）のうちの一つである。これを受けて新潟町、並びに古町通も大きく変わることとなる。
開港にあたって、明治 5（1872）年には外国人が集まる開港地にふさわしい町にしようと、新潟県令（のちの県知事）に着任した、楠本正隆によって町並みの改革・整備が行われた。楠本は、新潟を「清潔で、風紀が良い、開花した町」とすることを目指した。古町通にとって大きかったことは、町名の改めと、町並みのハード整備の二点であろう。神明町などの町名が廃止され、白山神社の側から順に〇〇通一番町、二番町といった名称に改められた。これにより、今現在馴染みのある呼び名に変わることとなる。そして明治 6（1873）年には町のハードの整備が行われ、石油ランプを灯す街灯の設置、通りに面する建築物の庇の高さの統一、道路・道幅の改修、下水の整備などが行われた。これによって、古町通の見た目も変化したと推測される。

（資料 11）明治 5 年ごろの古町通の写真（新潟歴史双書 3 新潟歴史物語）

一方このころから、花街に対する営業規制が徐々に厳しくなる。このことが、古町通にとっての大きな出来事の、二点目である。花街の営業に関する取り締まりの規則は、明治期において 18 個ほど公布されており、その後明治 45 年から、大正元年にかけて 1 つ、大正初年ころに 2 つほど公布された。次に大まかに流れを示す。

はじめは、明治 5（1872）年、貸座敷の営業許可区域が古町通地域・毘沙門島地域・熊谷小路地域の 3 地区に限定された。ここでは、江戸末期のころとほとんど範囲が変わらなかったため、特段大きな変化はなかったと思われるが、その翌々年、明治 7（1874）年には「貸座敷芸妓遊女規則」が公布され、貸座敷と旅籠屋の兼業の禁止、芸妓の売春の禁止など、場所とは別に営業形態に関しての規制がされるようになる。明治 13（1880）年には「貸座敷及娼妓取締規則」、「芸妓取締規則」が公布され、娼妓と芸妓の居住する家を別とすることなどが定められ、翌々年、先述のように、明治 15（1882）年に芸妓と娼妓の両方を行う「歌舞遊女」の営業が禁止されることとなる。このようにして「芸」と「色」が区別されていく中、明治 21（1888）年に古町通を大きく動かす出来事が起こった。ここから、何度も何度も古町通に襲い掛かる出来事である。明治 21（1888）年、古町通 4 番町を中心に火災が起こる。この火災で花街は全焼し、このことをきっかけに古町通 5・7 番町は貸座敷の営業許可地域から除外され、「遊郭統合」がはじまることとなった。明治 26（1893）年にはそれを追うかのように古町通 8・9 番町で火災が起こり、花街が焼失してしまう。これらが影響し、明治 31（1898）年には古町通地域は貸座敷の営業許可区域からすべて除外され、古町通より北側に下った場所に「新潟遊郭」が形成されることとなった。その後、明治 41（1908）年に再び古町通 8・9 番町にて火災が起き、これをきっかけに以前から進められていた新道（近代に、古町花街に通と通の街区を縦断するようにして開通した道）の開通が完了することとなる。

以上を受けて、古町通及び古町花街はより現在に近い形となった。古町通 5 番町は商店街へと変貌し、新道が開通し古町通 8・9 番町の表通りには商店が増えたという。このころには、古町通は新潟で一番にぎわっている町となっていた。これまで「花街」でもあった古町

通は、この明治期より、今私達の見ている商業地としての姿の基礎を形成したのである。

▷11　はな（やかな）まち、古町へ

さて、ここからは、大正から昭和にかけての古町通を見ていこう。
明治期、火災を繰り返し、町ぐるみ変化した古町通は、大正時代になるとその表面を変化させた。こう何度も火災を繰り返していては、市も住民も黙ってはいられなかったのであろう。建築物に対して防火制限や対策が設けられるようになり、建物一つ一つの容貌が変化した。

（資料 12）大火後の古町通（新潟歴史双書・新潟歴史物語）

資料 12 を、資料 11 と見比べて参照すると、その違いがわかるだろう。かなり近代的な町の風景に変わったことが見て取れる。庇がなくなり、屋根は妻入り屋根から平入屋根、さらにはかわらの屋根へと変化した。これまで店先にかかっていた暖簾は看板にかわり、ショーウィンドウもみられるようになったという。この店先の変化が、古町通に来る人達にも変化を与えただろう。これまで、店には目的があって訪れる人がほとんどであったが、ショーウィンドウができたことなどによって、いわゆるウィンドーショッピングがひろまってきたのである。古町通にも、そういった目的で訪れる人達が増えたであろう。通をぶらぶらする人達が増えたのは、このころであろうと推測する。
また、大正期の古町通の変化として見て取れる事柄がもう一つあった。「活動写真館」、いわゆる映画館の設立である。大正 3（1914）年、古町通 8 番町に大竹座、古町通 6 番町に電器館が常設の活動写真館として開館し、大変な人気を集めた。

（資料 13）電器館の写真（新潟歴史双書・新潟歴史物語）現在の富士屋のあたりに開館し

ていた
活動写真館は平日夜、休日の昼夜にそれぞれ一回ずつ興行され、1 回に 3 本ほどの映画を上映し、4 時間程度楽しむことができたという。また、手軽な料金で楽しむことができたため、庶民から人気を博していた。この大正初年ころ、新潟だけではなく日本全体で映画文化が発展しており、新潟でその文化の起点となった場が古町通であったと解釈して問題ないだろう。
こうして見ていくと、大正期の古町通は昼夜大変にぎわっていたように思える。きっと、休日の昼には映画を見に行って、そのまま町をぶらつくといった、定番のお出かけプランがあったのではなかろうか。平日夜には、一日の終わりにぼうっと映画を見てチルしてる人なんかが出没していたかもしれない。大正は短い時代であったが、その間に古町通は様変わりし、これまでとはまた違ったはなやかさをもつ町になった印象を受ける。

▷12　あがり、さがり(1)

続く昭和期は、長い時代であったこともあり、古町通にとって激動の時代であったように思う。古町通に限った話でなく、新潟全体、あるいは社会全体にとって大きな出来事がいくつもあり、その度に町の様子は明るくなったり暗くなったり、陰と陽を繰り返すような、そんな時代であったのではなかろうか。それらの出来事について、順を追って考えていきたい。
はじめに、昭和期にて、最も大きな出来事と言えば、悲しきかな、戦争であった。このころ、戦争が本格化するまでの間の古町通を見てみると、明治、大正時代の勢いをそのままに、はなやぎを増していたように思う。社会全体が近代化していく中で、新潟市の中心街の一部であった、古町通の様子にも変化が出ることは、必然だったとも言えるのかもしれない。戦争がはじまり、本格化するまでの昭和初期の、古町通の発展を考える。
このころ、新潟には二大百貨店が誕生した時代でもあるが、それに先駆けて古町通には近代的な鉄筋コンクリート造の大型商業施設が完成していた。明治 17（1884）年、花街の取り締まりや規制が厳しくなっていく中、古町通 6 番町には勧商場という、小売業者が集まった、百貨店のような施設が誕生していた。それが発展したものが、昭和 6（1931）年、同じ古町通 6 番町にて「新潟ビルディング」として鉄筋コンクリート造四階建ての商業ビルとして生まれ変わった。昭和 3（1928）年には古町通 5 番町に映画館、新潟松竹がオープンしており、古町通もより一層の賑わいをみせていた。そんなころ出来上がったのが、昭和期を彩ったであろう新潟の二大百貨店、万代百貨店と小林百貨店である。
これらは昭和 12（1937）年、同年のほぼ同時期にほとんど向かい合うような形でオープンする。

（資料 14）万代百貨店（にいがた街の記憶）（資料 15）小林百貨店（にいがた街の記憶）

（資料 16）古町ルフルの写真（自分で撮影したもの）

昭和 18（1943）年には万代百貨店が大和新潟店、昭和 55（1980）年には小林百貨店が新潟三越に社名変更し、その後も古町地区のシンボルかのように愛されていくが、これら百貨店の変遷と現在については後述する。

これら二つの百貨店がオープンしてまもなく、同年に勃発した日中戦争が長期化し、昭和 13（1938）には国家総動員法が公布、昭和 16（1941）年には太平洋戦争が勃発し戦争ムードが高まっていった。両百貨店、古町通ともに打撃をうけたであろうし、古町通周辺に限らず、社会全体のこのころの様子や空気感は、安易に想像できるようなものではないのだろうと思う。冒頭で触れたが、私の故郷である新潟県長岡市では、空襲があったため、この昭和時代に町は丸ごと作り変わることとなった。幸い新潟市では、このように大規模な空襲はなく、町が消えてしまうようなことはなかったが、町を歩く人々と、それに引っ張られるように町の様子は変化していたはずである。

また、町の様子という観点でいうと、昭和初期に町の様子を大きく変えたことは、着物の変化であろう。明治後期から徐々に洋服は広がってはいたが、一般に町行く人達の服装はこのころまで和服も多かったという。この昭和初期ごろから、制服や仕事着などが洋服になり、だんだんと普段着にも洋服が浸透していったようである。

▷13　あがり、さがり 2

昭和 20（1945）年にはようやく終戦を迎えたが、その後に古町通にとって影響の大きな出

来事が起こった。これまでも何回か大火災を起こしている新潟市であったが、昭和 30（1955）年にまたしても大規模な火災、2 回目の新潟大火が発生する（1 回目は明治 41（1908）年の大規模火災である）。出火場所は白山神社よりも南側であったが、気候も影響し古町通の中心部も焼け野原となった。終戦後も昭和 24（1949）年までは食材統制が続いていたため、戦後復興後、にぎわいやはなやぎが戻ってきてまもなくの出来事であったかもしれないと思う。幾度となく火災を繰り返していた新潟市は、もちろん迅速に火災復興を始めたが、この出来事は、古町周辺を含む新潟の町全体を大きく変える出来事となってしまった。
このころ、新潟市では地盤沈下が進み堀の衛生被害が問題となりつつあった。火災が起こり、言うまでもなく堀の水は濁り、衛生的にも、景観上にも問題があっただろうことは想像にたやすい。この新潟大火は、堀の埋め立てを促進するきっかけとなり、昭和 39（1964）年に新潟国体が開催されると同時に新潟市の全ての堀の埋め立てが完了することとなる。堀がなくなれば、堀に架かる橋もなくなる。町中にあったであろうささやかな水の音、気配がなくなる。堀がなくなれば、新たに道路が増える。このとき、古町通及びその周辺、新潟市すべての町の景観はかわり、町の何かが変わったことが確かであった。
さて、戦争、火災と悲しい出来事が続くなか、現代化を進める新潟市であったが、ようやくの良い出来事が先に出てきた新潟国体である。このころ、昭和 35（1960）年には古町通 5 番町にアーケードが完成し、古町通のにぎわいも十分であった。市全体をあげてのこのように大きなイベントの開催が、まちづくりを促進させることは必然である。古町通の活気はもちろん、それぞれの商店の気合もはいっていたのではなかろうか。
しかし、この、新潟市激動の時代である昭和期は、またしても大きな災害を迎えることとなってしまう。新潟国体が終了してまもなく起こったのが、新潟地震である。同年 6 月、新潟国体が閉幕して 5 日後の出来事であった。この大地震では人的被害は少なかったものの、道路のひび割れや建物の倒壊など、町を破壊する大災害であった。新潟国体をめがけて整備され、活気にあふれていたであろう新潟の町が壊れることは、歴史をなぞるととても無慈悲に感じるが、新たなまちづくりのきっかけともなったようである。

## ▷14　個と集団について

さて、ここまで新潟市全体で、あまりにも大きな出来事ばかりであったため、古町通への言及から少し遠ざかってしまった。この昭和後期から、平成初期にかけてはいよいよ古町通激動の時代である。オーバーアーケードの竣工・古町モールの完成・カミ一ノ古町の誕生・西堀ローサの誕生・万代シティの誕生など、古町通は商業地としてとても濃厚な歴史を刻んだ。ここでは、個と、集団について注目しながら歴史を追う。
古町通、及び新潟市の商業において、転換点となったのが昭和 10（1935）年にほとんど同

時開業した万代百貨店と小林百貨店の誕生であっただろう。この二つの百貨店の誕生をきっかけに、古町通には「個」の小売商店か、「集団」の百貨店（もしくは、ショッピングモール等。複合商業施設を指す。）か、という比較構造が出来上がったと考えている。数々の店舗が一つの建物にまとまり、天候にも左右されないで買い物ができる百貨店が誕生したことは、近隣の小売商店の営業に影響を与えたが、それはあまり良い影響とはならなかった。百貨店開店直後に売上高が 2〜3 割も減少した近隣の商店は、影響の大きさを認識した（新潟市史通史編 4 近代（下）より引用）という。これにより、小売商店は自らの経営の近代化と、差別化を図る専門店化の推進、商店街全体での運営の見直しなどを図るようになった。しかし、この両百貨店の繁盛は、今後の新潟市全体の商業に影響を与え、古町通にも大きく影響を与えることとなる。

昭和後期、そんな両百貨店の繁盛が影響してか、新潟市に相次いで複合商業施設が開業するようになる。「集団」の商売が有力となるのだ。昭和 51（1976）年には西堀ローサ、昭和 53（1978）年にはカミ一ノ古町が開業する。西堀ローサは西堀通 6 番町の地下にできた都市型地下街、カミ一ノ古町は古町通 7 番町にできた複合商業施設であった。古町通では、そんな複合商業施設に小売商店が対抗するためか、昭和 45（1970）年には古町通 7 番町にオーバーアーケードを設置した。当時最もにぎわっていた中心地であったこともあるのかもしれない。万代百貨店（大和新潟店）の客足をそのまま通まで引き寄せようと考えたのかもしれない。様々な可能性があるが、このオーバーアーケードが設置されたことによって、古町通の町の様子は確実に変化しただろうと思う。

また、現在からみて、このころの新潟の商業に関する、一番の大きな出来事と言うならば、昭和 48（1973）年の万代シティの誕生であろう。万代シティは、大手スーパーダイエーが万代シティビルに開業し、そのほか、テナントも多く入ったバスセンタービルや、ランドマーク的なレインボータワーなどと同時に誕生した、大規模な商業地であった。ここまで、新潟の商業の中心は古町通であったが、この万代シティの誕生によってその雲行きは徐々に変化し始めた。このころ、新潟では自家用車が普及し、車社会が発達していたことも影響しているだろう。万代シティには、広い駐車場も完備されていた。歩行者の数も平成元年から古町通 7 番町よりもダイエー前のほうが多くなり、市内の調査地点で一番の調査地点で一番の通行量となった（新潟歴史双書・新潟歴史物語より引用）という。

以上より、新潟の昭和後期は「集団」による小売業が最も発達した時期と言える。しかし、逆に言えば、このころから「個」の商売が弱っていった可能性も見て取れる。その状態は現在も同じである。先に述べたように、車社会である地方では、このような大型店舗が主流となることはある程度はしょうがないともいえるが、現状を表す指針の一つとして、ここに示しておく。

## 第 4 章　歴史の層と町柄について

さて、ここまで古町通のはじまりから昭和後期までの歴史の話をしてきた。次章では、町柄の調査のために行った実験について記述していく。その前にここでは、古町通の、歴史の層についての話をする。これを考えることで、町柄についてより理解できるのではないかと考えている。

はじめに歴史とは、当たり前だが過去に起こった事柄である。では逆に、今起こっている出来事も、未来には歴史になる。だが、私が今日何を食べたのか、ここ数か月で何を買っただとかは、歴史だろうか。事実としては確かに歴史ではあるが、未来の人にとってはきっと知る由もないことであろう。歴史は取捨選択され、編集されたうえで今知ることができる。ましてや、今回私は主として文献を中心に調査を行ったため、なおさらのことである。ここで生まれてくるものが、歴史の層である。

ここまで古町通の歴史を調べたわけだが、主として調査することができたものが古町通 5 番町から 8 番町周辺の出来事がかなり多かった。研究対象範囲のうち、上古町（古町通 1～4 番町）の歴史は薄く、古町通 5～8 番町の歴史は濃く編集されてきたということである。もちろん、事実としてどちらの歴史にも濃淡はないが、濃淡をつけて編集されているということだ。

続いて、この歴史の層は町柄にどう影響してくるのかを考える。歴史の層が濃いことは、そのままその場の知名度につながると私は考える。歴史がしっかりとある場であればあるほど、なおさらであるだろう。歴史の層が濃いということは、それだけその場で語られる歴史が多かったということであり、語られる歴史が多ければ歴史を知る機会も、知る人もおのずと増えてくる。歴史も町柄を表す要素の 1 つであると考えるが、歴史の層が濃い場であればあるほど、歴史は深く町柄に影響するであろうし、町柄がわかりやすくなることもあるだろう。基本的に、町柄は知名度が高いほど定まりやすい傾向にあるとも考えている。そういった点でも、歴史の層の濃淡は、町柄に大きく影響するであろう。

最後に、古町通の歴史の層と、町柄の区切りについて以上よりまとめると、研究対象範囲のうち、歴史の層が薄い範囲が上古町（古町通 1～4 番町）、及び古町通 9 番町であり、濃い範囲が古町通 5～8 番町となる。これにより歴史のうえでの町柄の区切りも、上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～8 番町・古町通 9 番町でそれぞれ区切れると考える。

## 第 3 部　町柄調査実験

### 第 1 章　調査について

第 3 部では、第 1 部で述べた古町通の偏見、理想、不満を調査した実験について記述する。はじめに、古町通の偏見、理想、不満の調査とはどのような目的、意図があるのかを説明する。

▷1　古町通の【偏見】とは

まず、場所にはしばしば、「その場所に行くこと」自体に価値がつくことがある。洋服で考えるとわかりやすいかもしれない。とある１つのブランドの服が、着る人の性格、ステータスまで演出することがある。音楽もわかりやすい。インディーズバンドの曲を聴いていると言えば、「音楽通のセンスのいい人」だとか「とんがっていて痛い人」だとか、それぞれ勝手な想像をするだろう。私はこれの町の場合を、町柄の１つとして捉えた。例えばだが、東京に詳しくない私からすれば、下北沢に行けば「通なセンスのいい人」になれた気がするし、恵比寿に行けば「意識の高い大人」になれた気がするのだ。これは必ずしもすべての場所、町についている価値ではないが、町にこのような価値がついているとき、その町に「行くこと」自体に価値がつく。これは町にとって財産のはずだと、私は考えた。このような、町に行くこと自体に価値がつく前の、その価値の原点のようなものが、その町の【偏見】であると思う。先ほど例に出した東京の地は、地方のその他の地域に比べ、人の目につく回数が圧倒的に多いうえ、知名度があるため、こういった価値はつきやすいと言える。一方で、地方の町にも、知名度がないゆえ価値にまでなり切れていない、価値になりうる、その町の【偏見】があるだろう。私はこれを、古町通の偏見として調査する。

▷2　古町通の【理想】とは

【理想】とは、【偏見】のプラスの部分の言いかえ表現とも言えるが、ここではあえてわけて考えていきたいと思う。【偏見】とは、その町の価値になりうるイメージそのものを指すが、【理想】の場合、町をその【偏見】に近づけてほしい、という意図も内包すると考えるからだ。また、【偏見】は、“その町の実情”は知らない、もしくは考えない、ある程度俯瞰した視点からの物言いとして考えるが、【理想】の場合、その町の実情も知りながら、「でもこうあってほしい」という気持ちがある、よりその町に近しい視点からの物言いと考える。

▷3　古町通の【不満】とは

【不満】は、【理想】より、よりその町の実情に迫った視点、及びマイナスイメージも含むものとする。その町の問題点を直接に指摘するものは、【理想】ではなく【不満】として今回考える。

以上の 3 点を調査する目的としては、「町柄」と、「その町の実情」の比較をすることにある。第１部の「町柄」の定義づけでは、「客観的事実、または周知の事実によって決定づけられた、その町の偏見、理想、不満を包括したもの」とした。その町に行く価値、及び町柄は、【偏見】に多く含まれ、その町の実情は、【理想】や【不満】に多く含まれるのではないかと考えている。そのため、以上の３点を同時に観測することで、それぞれを比較することができる、また、それらすべてを内包した「町柄」とはどのようなものであるのか、調査のうえもう一度定義づけすることができる。

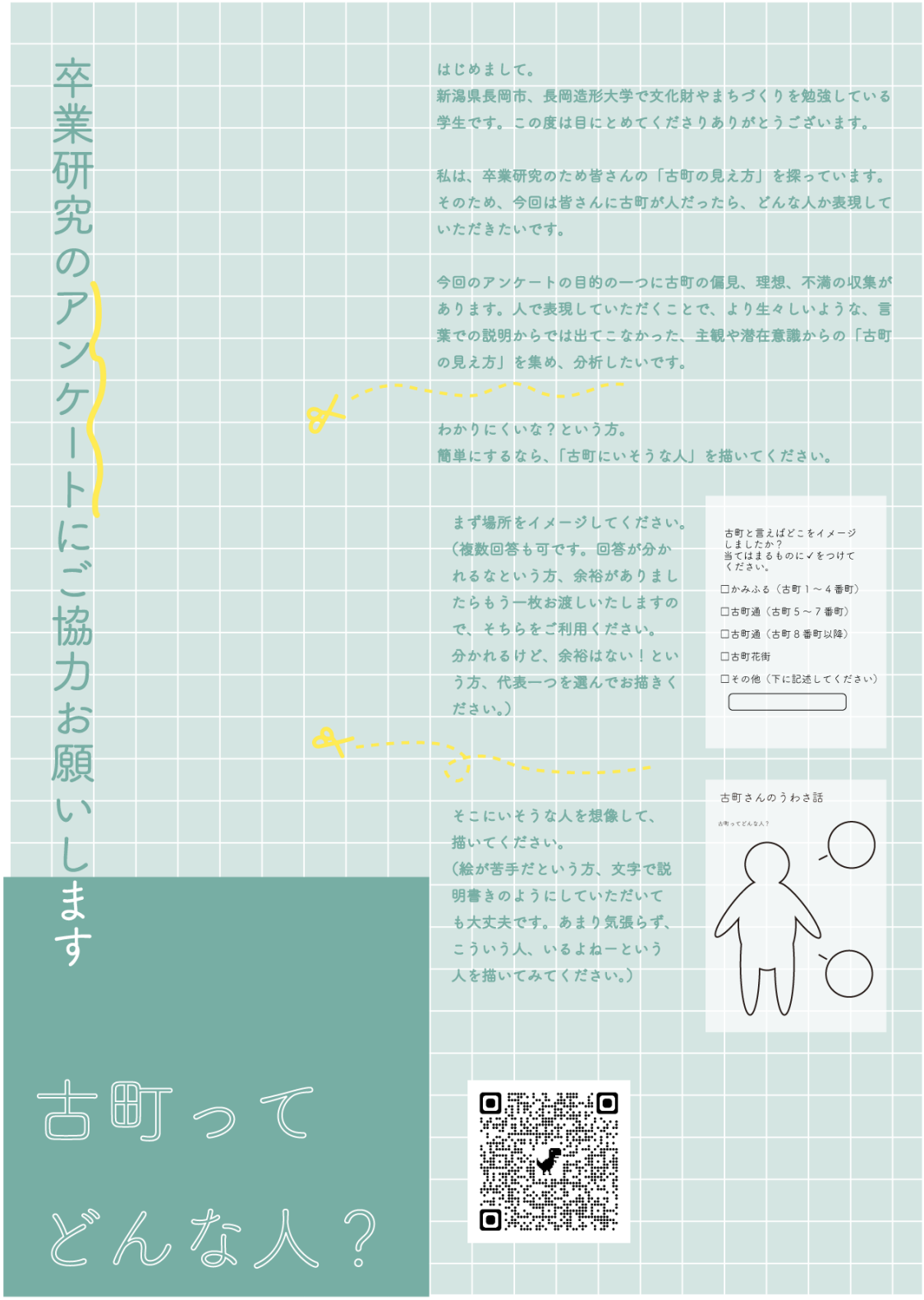
よって、調査にあたっての目的は

1. 古町通の偏見・理想・不満の収集
2. 収集した偏見・理想・不満それぞれの比較及び町柄とその町の実情の比較

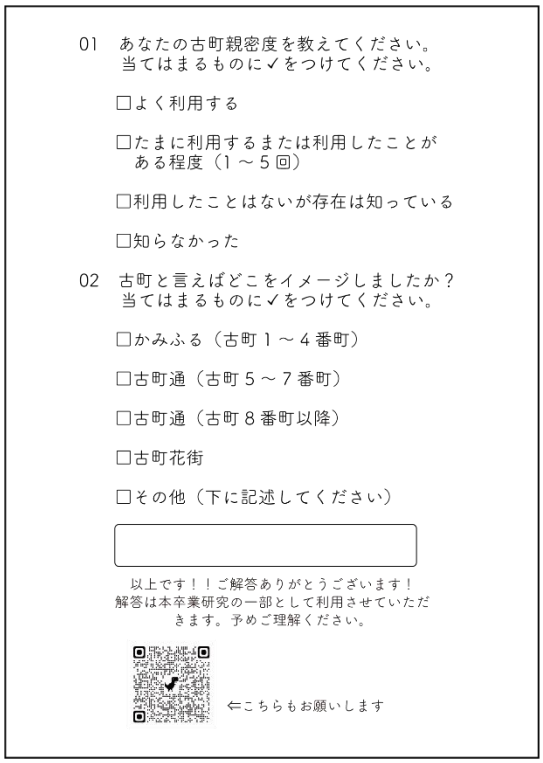
とする。そのために行う実験方法を、次に示していく。

## 第 2 章　実験方法

目的のために行った実験の方法について示す。
今回、私は町柄調査実験として「町を人で表す」ことを一般の方たちに行ってもらった。「古町はどんな人だと思いますか？」という問いに対し、絵を描いて解答してもらった。次に示すのは、実際に調査に使った説明ボードと、解答用紙である。




（資料 18）町柄調査実験・説明ボード



01　あなたの古町親密度を教えてください。
当てはまるものに✓をつけてください。

□よく利用する

□たまに利用するまたは利用したことがある程度（1 ～ 5 回）

□利用したことはないが存在は知っている

□知らなかった

02　古町と言えばどこをイメージしましたか？
当てはまるものに✓をつけてください。

□かみふる（古町 1 ～ 4 番町）

□古町通（古町 5 ～ 7 番町）

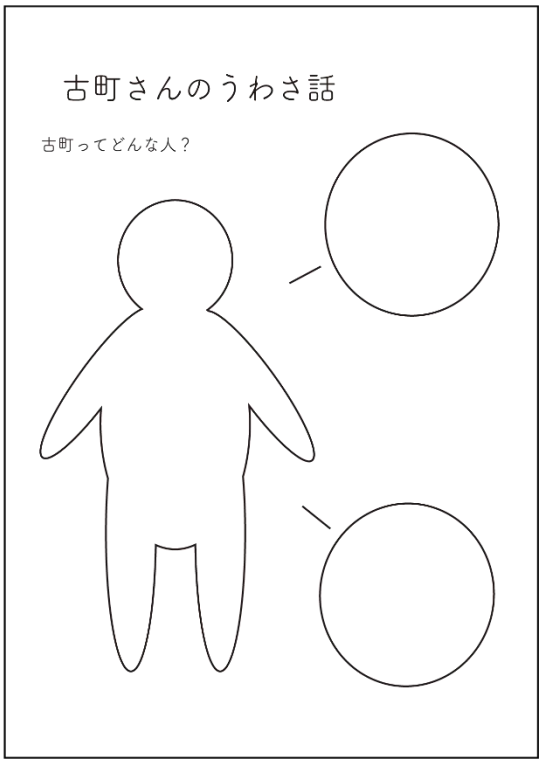
□古町通（古町 8 番町以降）

□古町花街

□その他（下に記述してください）

以上です！！ご解答ありがとうございます！
解答は本卒業研究の一部として利用させていただきます。予めご理解ください。

⇐こちらもお願いします




（資料 19）町柄調査実験・解答用紙

今回、以上の実験を行うにあたって、「説明」に気をつけた。アンケートとしてこれらを行うにあたり、意図がうまく伝わらなかったり、間違って伝わってしまわないよう、説明ボードに書いてある文章に加え、「例えば、下北沢ならパーマで柄の古着のシャツを着ている人、新宿ならサラリーマンや酔っ払いのイメージが私にはあります、そのようなイメージを古町で考えていただきたいです」というように具体例を使用して伝えた。その他、アンケートに回答していただいている間のコミュニケーションにも気を付けた。誰もが必ずしもイラストを描けるとは限らないため、イラストが難しいという方には文章で人物像を記述していただくようお願いしている。
また、設問 2 の選択肢について補足する。前章で歴史のうえでの町柄の区切りとして、上古町(古町通 1～4 番町)・古町通 5～8 番町・古町通 9 番町でそれぞれ区切りをつけたが、この実験では選択肢として一般化したほうが適切であると判断し、町の構造、形で区切ることとした。上古町（古町通 1～4 番町）はそのまま、オーバーアーケードがみられる古町通 5～7 番町、オーバーアーケードが途切れる古町通 8 番町以降で区切り、それぞれ選択肢とした。

▷1　実施場所

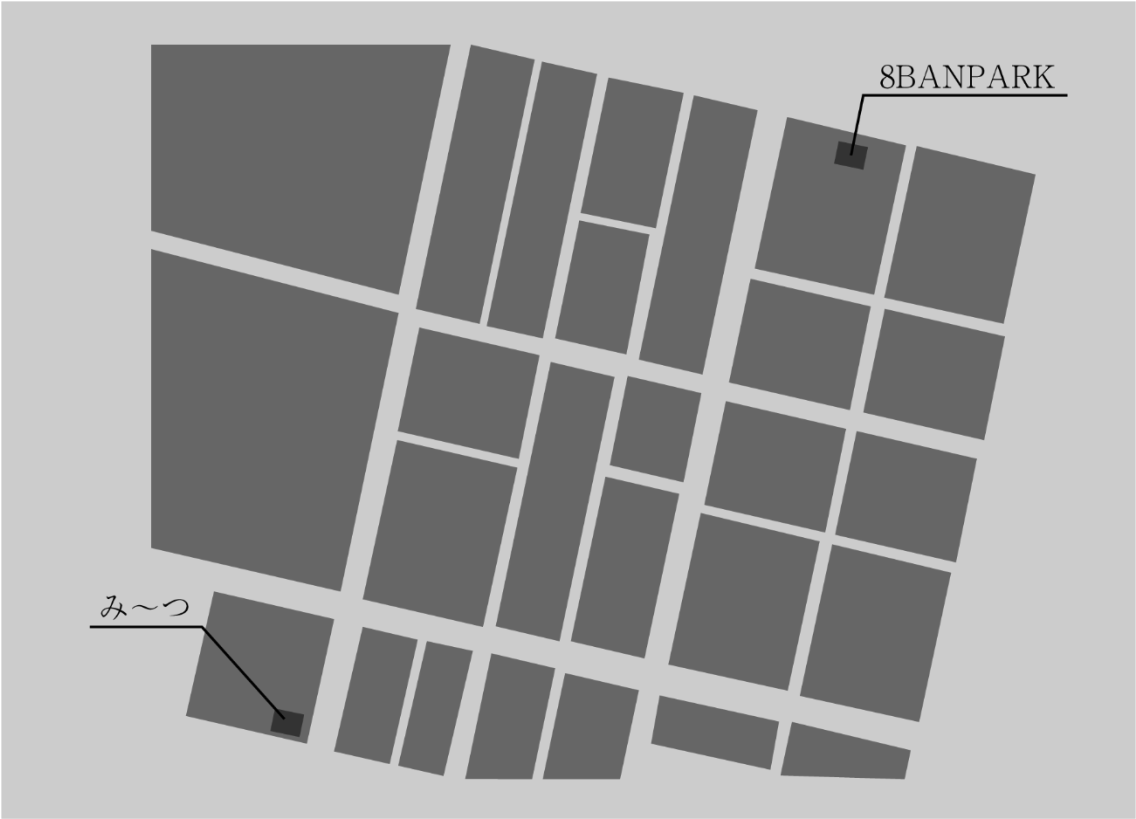
実験は、古町通周辺の、3 つの場所で行った。

1. み～つ（新潟三越跡地）
2. 8BANPARK(タキザワガレージ東堀)
3. 古町通 6・7 番町

1.み～つ（新潟三越跡地）と、2. 8BANPARK(タキザワガレージ東堀)について説明を加える。
はじめに、み～つとは、かつての新潟三越の横の、西堀通に面した路上で行っているイベントスペース兼休憩所のような場である。飲食店の屋台と、ベンチや使われなくなったバスを停車して設置しており、それらは休憩所として利用できる。主催者の方からのご厚意で、実験を行わせていただいた。平日と休日、2 日間にわたりそれぞれ昼ごろから夕方 5 時まで実験を行った。

（資料 20）み～つ（新潟三越跡地）の写真（自分で撮影）
※調査日には、み～つのボードの前に 1～2 つほどの屋台が出店していた。
次に、8BANPARK とは、古町通を挟んでみ～つの反対側、東堀通に面した立体駐車場、タキザワガレージ東堀にて行われたイベントである。飲食店などの屋台が多く出店していた。こちらも、主催者の方からのご厚意で、調査を行わせていただいた。休日の、午前 11 時から午後 4 時まで調査を行った。

(資料 21)8BANPARK(タキザワガレージ東堀)の写真(自分で撮影)(写真左)
(資料 22)8BANPARK(タキザワガレージ東堀)での様子(写真右)
また、各調査実施場所の位置関係は次のようになっている。




（資料 23）各調査実施場所の位置関係を示した図（自分で作成）
次に、以上の場所で調査を行った理由について述べる。今回、調査を実施するうえで、解答してほしい人物像の大前提として、「古町を知っている人（ここでいう古町は、古町地区、古町通関係なく、「古町」という名前と大体の位置を把握している人の意)」がある。それに加えて、「古町地区に詳しい人」「古町地区のことは知っているが特別に詳しくはない人」の 2 種類の方々からの回答が欲しかった。理由としては、先述の【偏見】、【理想】、【不満】の説明にある。【偏見】とは、“その町の実情”は知らない、もしくは考えない、ある程度俯瞰した視点、【理想】とは、その町の実情も知りながら、「でもこうあってほしい」という気持ちがある、よりその町に近しい視点、【不満】とは、同じく近しい視点を持ちながらも、より近しく、その町の実情と問題点に直接迫るような視点をもつとしていた。これら 3 つのデータを得るためには、以上のような 2 種類の方々から回答をいただく必要があると考えたからである。また、多くの数のデータが欲しい思いもあったゆえ、イベントを活用させていただいた。通りすがりにさっと寄ることもできるようなみ～つと、休日のお出かけにも活用されそうな 8BANPARK、さらに古町通で行うことで、この条件はクリアできるだろうと考えた。

## 第 3 章　実験結果概要

実験調査で得られた結果の概要を示す。結果、み～つでは 20 個、8BANPARK では 41 個、古町通 6・7 番町では 2 個、合計 63 個のデータを得ることができた。以下より詳細を示す。

（資料 24）調査結果用紙実物一覧

▷1　設問 1・古町親密度回答結果
よく利用する＝33
たまに利用するまたは利用したことがある（1～5 回程度）＝30
利用したことはないが存在は知っている＝0
知らなかった＝0

計画のとおり、希望の条件の方たちから回答をいただくことができた。「よく利用する」、「たまに利用するまたは利用したことがある（1～5 回程度)」と回答した方、ほとんど半数ずつ回答を得られたこともよかったと思う。

▷2　設問 2・「古町」でイメージする範囲回答結果
回答数が多い順に並べる。（記述して回答いただいたその他の回答を除く）

古町通 5～7 番町のみ＝21
上古町（古町通 1～4 番町）のみ＝9
古町通 8 番町以降のみ＝6
古町花街のみ＝5
上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降・古町花街＝5
上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町＝4

上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 8 番町以降＝2
古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降＝2
古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降＝1
上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降＝1
上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町・古町花街＝1
上古町（古町通 1～4 番町）・古町花街＝0
古町通 5～7 番町・古町花街＝0
古町通 8 番町以降・古町花街＝0
その他＝6

その他では、記述にて回答をいただいた。以下に示す。
古町通 5～7 番町・西堀＝1
上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降・古町花街・本町・西堀・東堀＝1
馴染みがなくわからない＝1
古町地区＝1
よく知らない＝1

結果、「古町通 5～7 番町のみ」と回答した人が 3 分の 1 を占めていることが最も特徴的であった。その他、「上古町（古町通 1～4 番町）と回答した人が 9 人と続いた以外は、比較的回答がばらついた。設問文を「古町と言えばどこをイメージしましたか、当てはまるものにチェックをつけてください」とし、自分がイラスト化できる明確なイメージがある範囲を回答すること、複数回答も可であることも必要に応じて伝えたが、人によって受け取り方の違う設問となってしまっていたのかもしれない。上記のように、明確なイメージを持てる範囲を回答した場合もあれば、形式的に古町地区全体を回答した場合、その他古町通に関する知見がなく、どの場所がどの名前なのかわからずに回答した場合もあると考えている。必要に応じて、場所と該当する名前を解説したが、わからないまま回答した場合もあるだろう。
また、もう 1 つ特徴的、あるいは「意外だ」と、想定外だと感じたことが「古町花街」を範囲に含めて回答した人の多さである。「古町花街のみ」は 5 人、その他ほかの場所と合わせて回答した人は 7 人、合計で 12 人と、案外多い結果となった。「古町花街」を印象的にとらえている人が多いこと、または「古町花街」を古町の原点のような存在として認識している人が多いのだろうかと予想する。

## 第 4 章　結果の分析と考察

ここからは、収集した回答結果を分析し、考察していきたいと思う。

まず、収集した回答結果をどのように分析していくのか、その方法について述べる。
今回ははじめに、得た回答結果を特徴、または種類ごとに分類することで、そこから見えてくる共通点などを探りたいと思う。ここでは、以下の 2 種類の分類分けを行う。
【1】　人物像の共通点ごとに分類
【2】　偏見・理想・不満に該当する回答ごとに分類
【1】では、今回、回答を収集した結果、ビジュアルイメージ、イラストに添えられた人物の解説文などが共通しているものがあった。それらを、その共通点ごとに分類して、それぞれ考察していきたいと思う。それぞれのグループが偏見、理想、不満のどれに該当するのかなどもここで考察しておきたい。また、ここではビジュアルイメージが明確にあるもの（イラストが描かれているもの）のみを取り扱い、ビジュアルイメージが明確にないもの（イラストがなく人物像を解説した文章のみのもの）はないもので一度分けることとする。ビジュアルイメージが明確にあるもの（イラストが描かれているもの）は、42 個あった。
【2】では、【1】での分類分けと、そこでの考察も参考にしつつ、また改めて回答全体を、偏見、理想、不満のどこに該当するのかを考えていきたいと思う。
最後にこれらの分類より、見えてくることがあるのか考察し、結論づけていく。

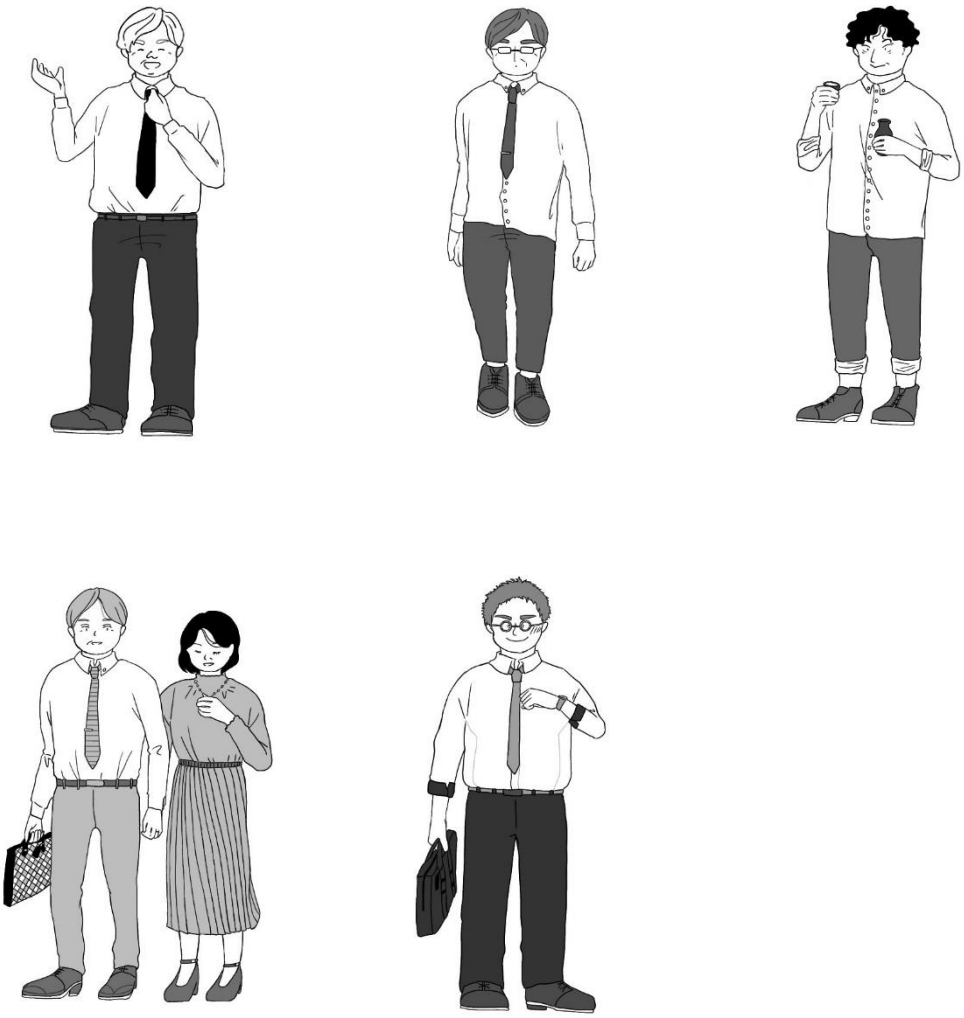
また、今回分類分けを論文で行うにあたって、いただいた回答でビジュアルイメージが明確にあるもの（イラストが描かれているもの）は、一覧で見やすいよう、私が改めて描き起こした。ここでは、それらのイラストを使用して分析を行っていく。

以下より、それぞれの分類を行っていく。

## 第 5 章　人物像の共通点による分類

人物像の共通点での分類分けでは、13 グループに分類することができた。2 つのグループに分類できるものも中にはあるが、それらは両グループでそれぞれ考察する。

### ▷1　サラリーマン



（左上から）【1】設問 1・よく利用する/設問 2・古町花街【2】よく利用する/古町通 5～7 番町【3】よく利用する/古町通 5～7 番町
（左下から）【4】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）・古町通 5～7 番町・古町通 8 番町以降・古町花街【5】たまに利用するまたは利用したことがある/古町花街

これらは全回答の中でも最も特徴が分かりやすく共通点も多い回答であった。これらの回答は、「スーツを着た男性である」こと以外にも共通項があった。各回答の補足解説文を見ていきたい。

【1】　ネクタイを取ると楽しくはっちゃける/サラリーマン風/見た目はまじめ、普通

【2】　フォーマルとカジュアルの 50 代くらいの男の人

【3】　サラリーマン/酒、日本酒好き/50 代男性美食好き/和食、さしみ、えびしんじょう好き

【4】　みんなそれぞれの居場所（店）がある/それぞれの居場所から紹介されて新しい居場所ができる/薬指リングしてるけど女をつれてる/インターネットではわからない/外から来ても入りづらい

【5】　Let’s go to set what parade there is!/I’m hungry!Let’s get some dinner（回答者は外国の方）

すべて、「ラフなサラリーマン」「飲み屋や道端でみかける多分サラリーマンなんだろうなという人」、という人物像が共通している。同じサラリーマンでも、朝引き締まった顔で歩くサラリーマンでも、昼ごろに少しだけ疲れた顔をしたサラリーマンでもなく、「仕事を終えたサラリーマン」の人物イメージがあることが見てとれる。

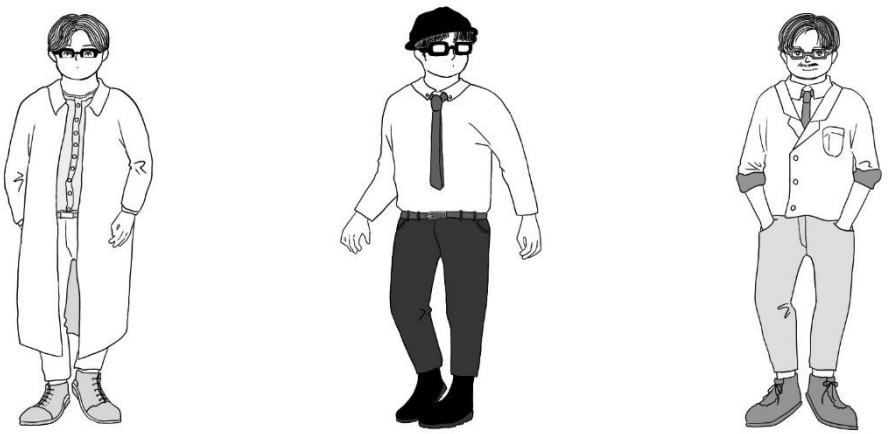
また、同じ「仕事を終えたサラリーマン」の中でも、【2】、【3】で明確に共通している事柄が「50 代の男性」であるという点である。加えて、【4】の男性のカバンは某高級ファッションブランドが設定されていた。このことより、ある程度の経済力、貫禄のある男性のイメージを抱いている人が多いことも分かる。

そのほか、【3】、【5】では「食」に関するキーワードも共通していることに気づく。ここで設問 2 ではどのような回答があるのか見てみると、【1】、【5】では「古町花街のみ」で解答していることが目立つ。古町花街が稼働する時間帯は基本的に夜である。また、古町花街は料亭の町でもあるため、利用する、楽しむためにはある程度の経済力が必要な町である。

以上をまとめると、すべてで「ある程度の経済力がある仕事終わりの男性」で共通した人物像があった。全回答のなかでもここまで人物像が固まって共通しているのは稀であった。古町通及び古町地区全体の「夜のイメージ」は固定しているのだろう。

最後に、このグループはすべて【偏見】に該当する回答であると考えている。

▷2　イケオジ



（左から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【2】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 5～7 番町【3】よく利用する/記述無し

サラリーマンとは別に、ビジュアルイメージが似通った男性の回答が何人かあった。以下に補足解説文を記載する。

【1】　モノトーンが似合うような古着が好きな人/上品さもあるし、トレンドもおさえているような人

【2】　おしゃれな年配の人のイメージ/おしゃれ上級者/美味しいお店がたくさん/落ち着いた雰囲気のお店が多い。でも人通り少ない

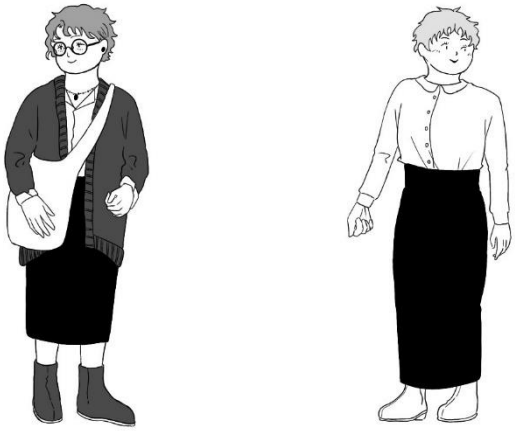
【3】“イケオジ”のあつまり/大人の世界

これらを見てみると、先述のグループに比べ人物像にばらつきがあることに気づく。【1】では、年齢層が不明瞭であるし、【2】は「年配の人」との記述があり、【3】は“イケオジ”と記述されている。【2】、【3】は「年配の人」と「オジ」なので、【2】に比べ【3】のほうが若い年齢層を想定しているのだろうかと考えており、3 つすべての年齢層はバラけている可能性がある。しかし、このグループはビジュアルイメージが似通っていることが特徴的であった。1 つのアイテムが共通しているというわけではなく、ネクタイ、スクエアフレームの眼鏡、センターパートで分けた長めの髪型など、共通しているものが多くあり、見た目の印象が似ているのだ。

以上をまとめると、「年齢関係なく、比較的フォーマルめな恰好をし、きれいめな印象を与える」人物像のイメージを抱いていることが見てとれる。補足解説文には、「上品さもある」、「おしゃれ上級者」、「イケ」など、人物に対して好印象な表現が使われているところも印象的であった。これも踏まえると、「相手に気持ちのいい印象を与える人」という人物像を、イメージとして持つ回答なのかもしれない。

設問 1，2 の回答では記述無しが混じっていることもあり、残念ながらあまり考察できることはなかった。
また、このグループも全体的には【偏見】に該当すると思うが、【2】の記述を見ると“その町の実情”に触れた記述があり、ここは注目しておきたい。

▷3　ショートカットのお姉さん

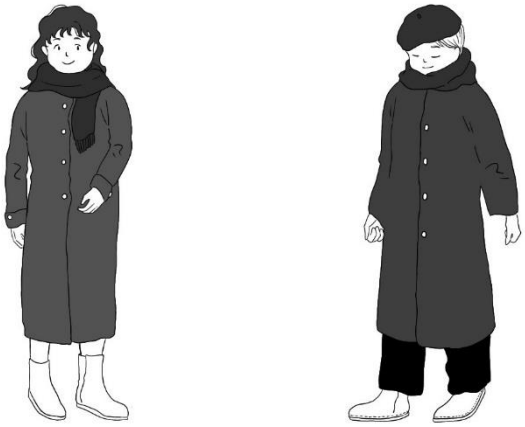


（左から）【1】よく利用する/古町通 5〜7 番町【2】よく利用する/古町花街

今回も、先述のイケオジグループ同様、ビジュアルイメージが似通っていることが特徴的だったため、回答を分類した。補足解説文を見ていく。
【1】　すごくおしゃれなショートカットのお姉さん
【2】　女性/30 代/職業デザイナーカフェ店主/こう見えて日本酒好き/ショートカット/ファッション好き
全回答中、回答した人物像が女性の回答は 15 個、男性の回答は 27 個と、男性に比べて女性をイメージした回答は少なく、中でも、「お姉さん」などの表記がされ、比較的若い年齢の女性を回答したものは 6 個であり、全体でみるととても少ない割合である。そんな中で、「ショートカットである」と明確な表記が一致しており、また、「ファッション好き」「おしゃれ」と、趣味嗜好も似ていることがわかる。本当に人間であるとしたら、仲良くなれそうな 2 人である。
設問 1，2 の回答を見ていく。【1】、【2】ともに古町を「よく知っている」人の回答ではあるが、設問 2 を見ると【1】は古町通 5〜7 番町、【2】は古町花街と、揃ってはいない。先述の通り少数派の意見であることから、古町通 5〜7 番町にこのように若い女性の町のイメージを持つ人も、古町花街にこのイメージを持つ人もいないと予想している。よって、この回答は「古町といえば、古町通であるし中でも中心地と言えば昔から古町通 5〜7 番町のはずだ」、

「古町と言えば、古町花街が伝統的で代表的だろう」というような思考からの回答であると思う。「この町はこういう人がいるイメージだし、この町に行けばこういう人になれる」という「こういう人」のイメージと、「この町」に該当するのは古町通のどこであるか、を求めている設問であったため、ここでの回答は求めていたものではないと判断し、深く分析をすることはしなかった。「よく利用する」、知っている人であるからこそ、概念的な回答が難しかったのだろうと思われる。
また、先で述べたように全体的には少数派の意見であること、一方で「よく利用する」人からの意見であること、設問 2 とイラストのイメージの一致や共通項が、この回答内でも、全体でも見られないことなどから、これらの回答は【理想】に分類した。もう少し詳細に述べると、もしかしたら、まだ知られていない古町の一部であるのかもしれないと感じた。上記のように、設問 2 に、自分なりの考えをもって事実の回答をしているとしたら、古町をよく利用する人たちが、偏見によって古町に実際にいないかもしれない人を回答するとは考えられないからだ。実際に、古町地区で見かける人を描いているはずであるし、その解像度も高いだろうと考えた。ただ、この回答が少数派であるということは、まだこの人物像のある町のイメージは、浸透していないということだろう。以上より、“その町の実情”に近い視点からの回答であると解釈し、【理想】に分類することとした。

▷4　マフラー



（左から）【1】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 5～7 番町、古町通 8 番町以降【2】よく利用する/上古町(古町通 1～4 番町)、古町通 5～7 番町

ビジュアルイメージが特徴的かつ、一致している回答をまとめた。補足解説文を記載する。
【1】　古町は温かい人が多い/おしゃれな人も多い/自分のやりたいことやってる人が多い
【2】　音楽/落ち着いてる

このグループでは、補足解説文は全く別の視点から自由に記述されているが、回答のビジュアルイメージが一致していたためそこから読み取れることを考えた。不思議にも、マフラーにロングコートを着用した人物像が共通していたが、これはどういうことだろうか。私は、「屋外」であり、「気温の低い地域」といった環境によるイメージだと考えている。仮に、このアンケートをショッピングモールで行ったとしたら、こういったビジュアルイメージの回答は出てこないだろう。よって、これら 2 つの回答は環境が影響したビジュアルイメージ、“その町の実情”が表れた回答、かつ「こうなってほしい」というような希望が含まれている回答には該当しないため、【不満】に分類する。

▷5　古風なおじさま(1)

(左から)【1】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町)、古町通 5～7 番町、古町通 8 番町以降、古町花街【2】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5～7 番町【3】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5～7 番町

かなり個性的な外見でグループをつくることができ、とても面白いと思った。補足解説文も見ていきたい。

【1】　イタリア軒サイコー新潟の洋食は新しい/今日の貿易、米相場が大変だった、明日はどうだろう

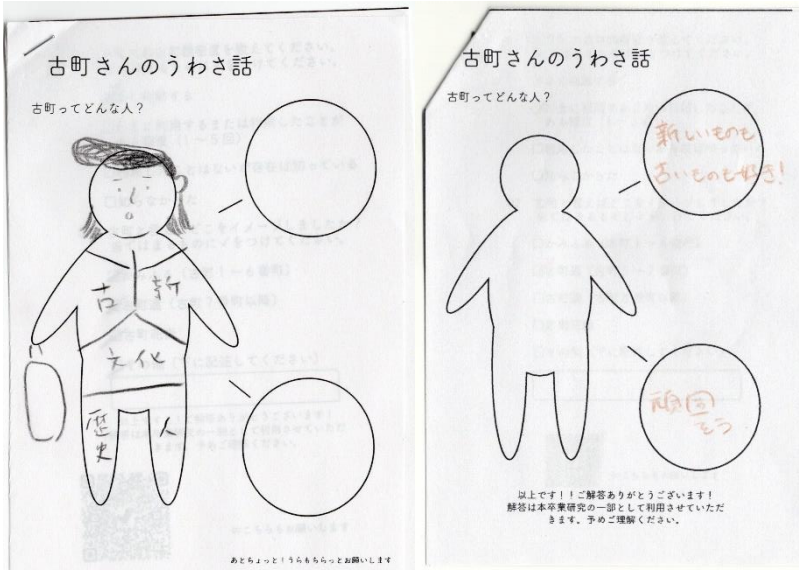
【2】　レトロなおっさん

【3】　古風な感じ/シャツ in/革靴/おじさんは中身のない会話しそう、「昔はこうだったんだよ」

実は、露骨なものは補足解説文を見てみるとわかるように【1】のみであるのだが、それと似たビジュアルイメージの回答が 2 つも出てきたことに驚きを感じる。【1】の回答を描い

ていただいた際、「昔の人を描こうかな」と言って回答を行っていたので、欲しい回答の仕方ではなかった。しかし、その後になって【2】、【3】の回答が出てきたため「昔の人」のつもりで描かれたつもりが、案外共通項ができ、少数派でも的外れでもなくなった。特に、【1】と【2】はかなり回答のビジュアルイメージが似ていた。ハット帽、長めのジャケット、杖、ちょび髭、ネクタイやベストなど、全回答の中でもここまでアイテムなどがかぶっているものはここだけであった。【3】にはここまでの一致はなく少し違ってくるが、ハット帽や補足解説文の「レトロ」や「古風」が共通している。
また、ここで一致した点がもう一つ、設問 1，2 の回答であった。【2】、【3】が「たまに利用するまたは利用したことがある」、「古町通 5～7 番町」で一致していたのだ。【1】は「よく利用する」と、全選択肢を選択していたが、先述の通り回答の仕方も狙い通りのやり方ではなかった点から、設問 2 でも古町地区に当てはまるものをすべて選択した可能性が高いため、ここでは一度置いておく。【2】、【3】の回答に注目すると、「たまに利用するまたは利用したことがある」程度の人が、古町通に対して古風なおじさまの人物像のイメージを持っているということになるが、ここではこの回答が出てきた意図を 2 つ予想することができた。一度、別グループをみておきたいため、後述する。

▷6　温故知新




（左から）【1】よく利用する/無効回答【2】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5～7 番町

これらは、ビジュアルイメージが特殊・なかったもののグループの一つである。「新」と「古」、「新しいものも古いものも好き」といった文面や表現に似た部分を感じたので分類した。これら 2 つの回答から読み取れることとしたら、古町に対して「新しいものと古いものが共存している」という認識を持っている点であろう。

これらを踏まえて、もう一度「古風なおじさま」達について考えてみる。

▷7　古風なおじさま(2)

さて、「古風なおじさま」の人物像が回答としてでてきた意図を 2 つ予想する。

1 つは、年配の男性の、おめかしの場として認識されている可能性があると考えた。ハット帽をかぶったり、ジャケットを着たり、「古風」と認識することもできるが、年配の男性が、少し華やかな場に出かけるとき、特別なお出かけのときにする服装ととらえることもできる。ここで注目したい点が、設問 1，2 の回答である。設問 2 にて、【2】、【3】は「古町通 5～7 番町」を回答しているが、先述の通り、古町通 5～7 番町は長らく新潟の商業の中心であり、百貨店のにぎわう場であったのだ。年配の方にとってこの場所は、ずっと「おめかししていく場所」のイメージがあっても不思議ではないし、実際に何をするでもなくとも、この場にはおめかしをしてくる人たちがいるのかもしれない。

2 つは、町そのものを「古風な町」として認識している場合があると考えた。「古い文化がある町」とでも言うのだろうか。ここで、先ほどの温故知新グループを見ると、古町地区に「古いもの・文化がある」という意識をもっている人は確かにいることがわかる。温故知新グループの【2】は、ビジュアルイメージこそないものの、設問 1，2、補足解説文を含め、回答が古風なおじさんグループととても似ている。よって今回、私はこの 2 つ目の予想を自分の考えとして採用し、この 2 つのグループを 1 つにまとめて考えることとした。

さて、この 2 グループをまとめて、ここでは【理想】に分類することとした。「古い文化がある」という意識、または認識は、良し悪しに関わらない概念的な町のイメージというよりも、“その町の実情”を理解しながらも、町がもつ魅力を語っている姿勢がみられる点、事実、古町通は新潟市に古くからある町であり、歴史を持つ町である点、また、マイナスイメージではない点などを加味し、【偏見】及び【不満】ではないと判断した。

▷8　リッチな女性

（左から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/よく知らない【2】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1〜4 番町）【3】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降

先に、回答に女性を描いた人は少なかったということを記した。全回答中女性を描いた回答は 15 個であったが、年齢層とは別に共通項が見いだせる回答があった。補足解説文を参照する。

【1】　お金持ちのご高齢の方/GU とか行かない/カフェでご飯済ます/聞いたことないフルーツ食べてる（実話）/タイトスカート/細いヒール/ストール巻いてる人のイメージ/オシャレ

【2】　おしゃれなお年寄り/人生楽しんでそう/ていねいな暮らししてそう

【3】　お金もち/ハイブランドを身にまとってる

【1】、【3】は「お金持ち」の人物像が一致し、【2】も、お金持ちの記述はないがいかにも生活を充実させていそうな、少なくともどこかリッチな人たちという点で共通していると感じた。これまでを振り返っても、ハット帽をかぶらせたり、フォーマルできれいめな恰好のグループがあったりしていたが、ここにきて改めて「お金持ち」と具体的に記述されることによって、古町通に対し、リッチな印象を持つ人は少なくないのかもしれないという予想が出てきた。

設問 1、2 をみてみる。設問 2 に共通点は見られないが、設問 1 はすべて「たまに利用するまたは利用したことがある」で一致しているのだが、ここで注目したい点が、「よく利用する」で回答をしないような、古町地区と一定の距離間のあるような人たちの回答であるにも関わらず、比較的イラストや記述でのビジュアルイメージの回答に具体性があった点だと思う。ましてや、【1】の方は、設問 2 で「よく知らない」と回答をしているにも関わらず、

ビジュアルイメージでの記述が明確であり、これはだいぶ【偏見】の色が濃い回答であるなと感じた。
ここまでをまとめると、古町通に対して「リッチ」な場という認識は多い傾向にあり、かつその認識は【偏見】として色濃く、根強いものではないのだろうかという予想をたてることができた。この予想について、以下でまた考察をしていこうと思う。

▷9　古町通について考える人達

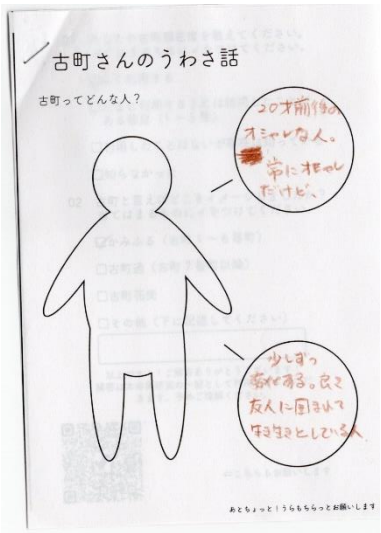
（左から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5〜7 番町【2】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【3】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5〜7 番町
先に古町通に対して「リッチ」という認識を持つ人がいるのではないか、との予想を立てたが、このように「古町は〇〇」と考えを記述した回答もいくつか見られたため、参考に示しておく。以下に補足解説文を記述する。

【1】　地元のお父さん/きっさてん、カフェが多くて、むかしながらの町/やさしい古町が好き
【2】　古町ってレトロな町だなー
【3】　60 才以上のおばあちゃん/おしゃべり沢山してそう/町並み LOVE そう！

それぞれ古町通にいる人が古町通をどう感じるのか、どんな部分が好きなのかを具体的に記述して回答していた。3 つに共通しているのは「むかしながら」や「レトロ」、具体的にどのような町並みを指しているのか、は記述されていないが町並みを愛しているという記述から古町通に対して「尊敬」や「品格」をもつ町だと認識しているように読み取れた。どことなく、「リッチ」につながる部分があるように思う。少なくとも、派手な、にぎやかな場所というよりは、落ち着きのある場として認識している場合が多いのだろう。また、ここでの回答の人物像が、偶然にも年齢層や性別が様々であったことも特徴的であると感じた。

どのような属性の人でも、先述のような認識をもてる町であると考えてよいのかもしれない。これらの回答は、「古町通はこうだな」を俯瞰で記述している、設問 2 でもすべてたまに利用するまたは利用したことがあると回答しており、古町通に詳しい人が実際の町並みに対して考えていることを記述しているようではないため、【偏見】に分類する。
一方で、同じように古町通について考えていることを、別の視点から記述した回答も見られたため、参照していきたいと思う。

▷10　古町通の人付き合いについて考える人達




（左から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 5~7 番町【2】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【3】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）

古町通の人付き合いについて記述された回答が、その内容が特徴的であったためここにまとめた。補足解説文を参照する。

【1】　新潟のディープないいところを知ってる人！/古町ふきんにいる人たちってだいたいつながってるイメージ
【2】　お洒落かつ気品ある人のイメージ/町（人）全体で親密なイメージ
【3】　20 才前後のオシャレな人。常にオシャレだけど、少しずつ変化する。良き友人に囲まれて生き生きとしている人

このように、古町通の人たちの人付き合いについて、親密な印象を抱いていることを記述した人がいた。特に注目したい点は、【1】、【2】と【3】の記述の視点が微妙に違う点と、【3】のみが設問 1 で「よく利用する」と回答している点である。【1】、【2】では「あそこの人たちは親密で、つながりが深い」とその人間関係の外から俯瞰した視点である一方、【3】では

これをその内部から「良き友人に囲まれている」と表現している。どちらも古町通の人付き合いというか、人間関係について記述をしているが、その目線が違うのだ。このことについて、【1】、【2】の回答者本人は決してマイナスな表現としてこのように記述したわけではないと思うが、私としてはこの目線の違いは少し気になってしまった。もちろん、その場に詳しい人とそうでない人で認識に違いは出るであろうが、たまに利用するまたは利用したことがある程度の人が、「つながっている」と表現することは特に気になる。この視点と表現の差が、いわゆる「内輪ノリ」や「入りにくさ」「近寄りがたさ」を作り出す危険因子のようにも受け取れた。そのため、【1】、【2】をここでは【不満】に分類することとする。

▷11　年配の方々

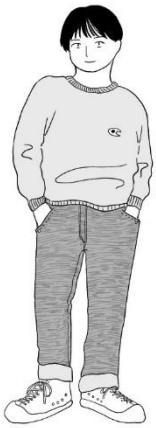
（左上から）【1】よく利用する/古町地区【2】よく利用する/古町通 5～7 番町、古町通 8 番町以降、古町花街【3】よく利用する/古町通 5～7 番町【4】たまに利用するまたは利用した

ことがある/古町通 5〜7 番町
これまでにも何回か年配の方を回答した回答は出てきていたが、これまではその他の目立った要素でグループ分けをした。ここでは、一度年配の方であるということが一番の特徴として表れている回答のみを集めることとした。以下に補足解説文を示す。

【1】 黒かみボブ/タートルネック/ゆびわ/ガニ股/ロングスカート/小太り/買い物してるおばさん
【2】 年配の人多い/お寺が多い（お墓が見える）/喫茶店が多い/美味しい食べ物の店多い/観光スポットがない（おほりが残ってたらよかった）
【3】 おじさん
【4】 70~80 歳男性の商人/がんこで言うことときかない人/ジジイ

ここでは年配の人を想定しているという条件だけで集めたため、回答の仕方や内容はなかなかによりどりみどりである。しかし、【3】を除いて、それぞれ多少のネガティブなイメージをもっていることが見て取れることが共通していた。また、設問 1、2 を見てみると設問 1 では【4】を除いて「よく利用する」と回答している点、【1】は「古町地区」とはしているものの、【2】、【3】、【4】の回答では「上古町（古町通 1〜4 番町）」の回答がなく、【2】にいたっては「上古町（古町通 1〜4 番町）のみを回答から外していることも印象的であった。よってここでは、「年配の人」などと年配の方を指す年齢の記載があるものの設問 1、2 の回答を集計した。結果、このグループの 4 つの回答を含め、以下のようになった。
全体：13 個
設問 1/よく利用する：4 たまに利用するまたは利用したことがある：9
設問 2/上古町（古町通 1〜4 番町）を含む：3 上古町（古町通 1〜4 番町）を含まない：10
全体で見てみると、「よく利用する」の回答はむしろ少なかった。一方、上古町（古町通 1〜4 番町）を含む回答は少なく、一番多い回答は「古町通 5〜7 番町」であったが、これらは全体を通して多いためここでは一度置いておく。設問 2 では、「よく知らずイメージができない」との回答が内 2 つあることが特に印象的であった。
ここまでをまとめると、古町通及び古町地区に関して年配の人のイメージを持っている人は多く、「よく知らない」人にもそのイメージがついているという点、良く知っている人にとってはネガティブイメージである点、上古町（古町通 1〜4 番町）には以上のようなイメージはあまり見られないことなどが分かった。
最後にこのグループの 4 つの回答について【偏見】、【理想】、【不満】のどれに該当するかを考える。ここでは、【3】のみ回答に情報が少なく、年齢層のイメージしかないため【偏見】に分類できると判断した。一方、【1】、【2】、【4】では記述からネガティブな印象も見て取れるため【不満】に分類した。

▷12　リーバイスのデニムパンツ



（左から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5〜7 番町【2】よく利用する（5 番町で働いています）/古町通 5〜7 番町

ここからは、年齢層を比較的若めに考えて回答したものを中心にまとめていく。はじめに、これら 2 つの回答は、服装の詳細を丁寧に回答いただいた点が特徴的であった。その唯一同士、「服装の詳細が書いてある」という点に加えて、偶然にも「リーバイスのデニムパンツをはいている」点で一致した。以下に補足解説文及び服装の詳細を記載する。

【1】　champion スウェット/LEVI'S ジーンズ/古着屋が多いイメージ。古着を着てる人の印象。

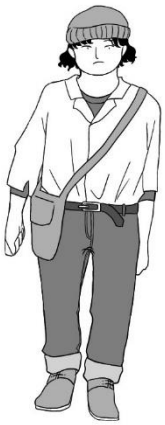
【2】　ラルフの SWT にリーバイスのデニムにスニーカー/古着屋によく行ってて、パーマで、シャモニーでタバコとコーヒーを楽しむ学生/カジュアルな服装が好き。集団でお店に遊びに行ってる学生たち。

ここまで見ると、リーバイスのデニムパンツ以外にも、スウェットを着ていること、古着屋や古着といった言葉も一致、設問 2 の回答は古町通 5〜7 番町で一致しており、共通項の多いグループである。ちなみに、シャモニーは、古町通 5 番町にある喫茶店である。

今回、後にもう一度詳しく述べるが、回答に使用された単語について数の多いものを集計した。その中でも「古着」という単語は最も使用回数が多く、様々な人の回答で見られたフレーズだが、実際にどのようなテイストの服装をしているのかは詳しく描かれていない場合も多かった。そんな中、唯一この 2 つの回答からは際立って具体性がみられたわけだが、どちらもシンプルでラフな印象である。【2】は学生であると人物像が明記されているが、この 2 つの回答の一致具合を見ると、【1】も学生、あるいは同じ年齢層と考えてよいだろうと判断した。全体でも、「学生」といった単語が多くみられ、「古着」と「学生」が一致する回答については、この 2 つの回答と同様のビジュアルイメージだと仮定してもよいかもしれな

い。
また、これらは服装や人物像に関しての具体性が高く、“その町の実情”に関して語っている部分はないため、【偏見】に分類してよいと判断した。

▷13　ニット帽



（左上から）【1】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【2】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1〜4 番町）【3】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1〜4 番町）【4】よく利用する/上古町（古町通 1〜4 番町）・古町通 8 番町以降

どういうわけか、ニット帽を身に着けたビジュアルイメージが多くあった。ここでも、それぞれ回答の補足解説文に共通項を見いだせたので、一部を見ていきたい。

【1】　昔着屋さん
【2】　古着を着ている
【3】　とにかくおしゃれ/全てにこだわりを持っている、基本的にチェーン店には行かない
【4】　古着着てそう！/おしゃれな感じ

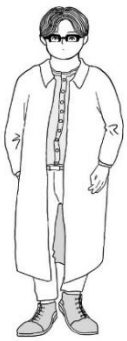
使われている単語がかなり被っていることが分かる。実は、これらの言葉はこのグループに限らず多く使用されている言葉だったのだが、そのことについては後述する。ここからわかること」は、「おしゃれ」で、「古着」などの一点ものをこだわって身に着けるような人たちがいて、そのような人たちにはニット帽をかぶっている印象をもっている人が一定数いるということである。では、なぜ、ニット帽なのか？私なりの考察をした。私はここに、「新潟県の商店街（を含む商業地）で行った調査である」特徴が出ているのではないかと考えた。ここで、これらの回答の設問 1，2 の回答を見てみると、設問 1 では【1】～【3】が「たまに利用するまたは利用したことがある」、設問 2 では「上古町（古町通 1～4 番町）」、「古町通 8 番町以降」のどちらか、あるいは両方で回答していることがわかる。そして設問 2 では、逆の言い方をすると「古町通 5～7 番町」、「古町花街」と回答した人はいないことになる。ここで不思議に思う点が、「上古町（古町通 1～番町）」と「古町通 8 番町以降」が選ばれているのに対して、なぜ「古町通 5～7 番町」の回答はみられないのか、という点である。設問 2 で「古町通 5~7 番町」を回答に含んだ人は 35 人と、半数以上を占めているため、この回答は、今回特徴的であることがわかる。では「上古町（古町通 1～番町）」と「古町通 8 番町以降」と、「古町通 5～7 番町」との違いは何があるのか、というと、一つはオーバーアーケードの有無にあると考えた。そして、オーバーアーケードの有無で出てくる違いは、オーバーアーケードがあるところは「屋内感」が強く、ないところでは「屋外感」が強くあるところであろう。同じ商店街でも、オーバーアーケードのあるところの環境は、ないところに比べてよりショッピングモールに近い環境をもっていると思う。

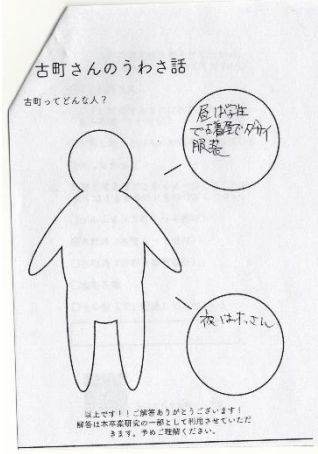
「ニット帽」というアイテムについて考えてみると、おしゃれ着であることとは別に、機能面では防寒具であるということが挙げられる。新潟の気温は夏を除いて決して高いほうではない。海が近いため風も強い。屋外を歩くには、防寒具が必要な季節が多いのだ。

これらをまとめると、ここに表れている人物像は表面的には「ニット帽をかぶっている人」であるが、「ショッピングモールなどに入っている店ではなく、寒くても路上にあるような個人店に好んで行くような人」を示しているのではないかとわかってくる。そして、これを踏まえると、「こだわりが強い」と記載されていたのは【3】のみであったが、ここで回答された人物はすべて「こだわりの強い人」であると解釈もできる。逆説的に「こだわりが強く、寒くても風が強くても古町通を訪れたい」という人たちが、そのようなときに選ぶファッションとしてニット帽を選択している場合が多く、事実古町通にはこの風貌の人が多いという仮説も立てることができるのではなかろうか。

また、「たまに利用するまたは利用したことがある」と回答した人が多いことから、これは比較的その町に詳しい人たちとは違う視点からの意見、【偏見】であるということが分かる。

▷14　古着





（左上から）【1】よく利用する/無効回答【2】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 5～7 番町、古町花街【3】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）

（2 段目左から）【4】よく利用する/古町通 5～7 番町【5】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5～7 番町【6】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 8 番町以降

（3 段目左から）【7】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【8】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 8 番町以降【9】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1～4 番町）

（4 段目左から）【10】よく利用する/上古町（古町通 1～4 番町）【11】よく利用する/古町通 5～7 番町【12】たまに利用するまたは利用したことがある/上古町（古町通 1～4 番町）【13】たまに利用するまたは利用したことがある/古町通 5～7 番町

「古着」という単語は、全回答の中で最も多く使用された単語の一つであった。既出の回答もあるが、ここで一度一覧にまとめておく。補足解説文も記載する。

【1】　パーマ/色つきメガネ/ミッキートレーナー(古着)/かっこいい自転車乗ってそう/ユニークな自分が好き/No.1 より Only1

【2】　丸メガネ/オシャレ、センスある、自分の好きなものを分かってる/ソロ活上手い/年齢問わず大人/1 人でお酒のめそうな人
【3】　ふるぎや/おねえさんみたいな

設問 1，2 を集計した。
よく利用する：7　　たまに利用するまたは利用したことがある：6
上古町（古町通 1～4 番町）：6　　古町通 5～7 番町：5　　古町通 8 番町以降：3
古町花街：1
集計結果を見ると、「よく利用する」「たまに利用するまたは利用したことがある」と回答した人に関わらず、古町通に「古着」の印象を持つ人は多いことがわかった。また、設問 2 でも「上古町（古町通 1～4 番町）」「古町通 5～7 番町」と回答した人がほとんど同率であり、「古着」の印象はどちらの場所でも持つ人がいることがわかる。逆に、古町通 8 番町以降、古町花街に関しては回答が少なく、これら 2 つの場所に「古着」のイメージを持つ人はいないことが見て取れた。その他、ここでまとめた「古着」の単語を使用した回答では、同時に「学生」の単語の使用回数も多い傾向にある。このことより、同じように上古町（古町通 1~4 番町）、古町通 5～8 番町には若い年齢層の人、学生が多く、古町通 8 番町以降、古町花街に関しては少ないと多くの人が認識していることがわかった。
先に示したものも含まれているが、同じようにこれらは“その町の実情”に対して注目しているものではないため、すべて【偏見】に分類する。

## 第 6 章　【偏見】【理想】【不満】に該当する回答での分類

ここまでにも触れてきたが、ここではそれぞれの回答を【偏見】【理想】【不満】に分類して一覧で示し、そこから見えてくることを考えたい。

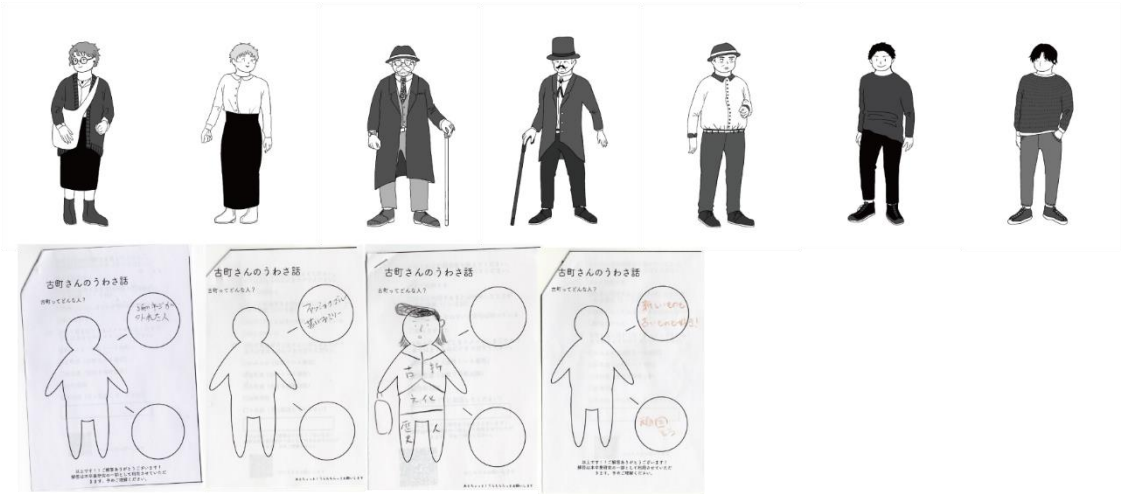
▷1　偏見
【偏見】に分類した回答を一覧にまとめた。

（資料 25）【偏見】回答一覧

【偏見】に含まれる回答は、先述のサラリーマングループ、古着グループの数が多く特に目立つが、注目したい点としては、回答の人物像の年齢層が幅広い点である。サラリーマングループは 40～50 代くらいの中高年、古着グループは 20～30 代や学生を想定した回答も多

いほか、年配の方を想定した回答も含む。比較的、町には「年齢層」があり、それが町柄を表すのに大きく影響しているだろう。それぞれの回答した人にとって、町の年齢層が回答に表れている年齢層なのだろうが、それを集めた際に、ひとつに固まらないことは注目すべき点である。この、年齢層が分かれている点について、それぞれ回答する際に想定した古町通が違う可能性がある。よって、【偏見】に分類した回答のうち、年齢層が分かる記述のある回答のみを「若者」と「中高年」に分類し、設問 2 の回答を比較した。なお、年配の方を想定した回答については、年齢層を記述している回答の数が少なかったため省略する。結果、若者では上古町（古町通 1～4 番町）と古町通 5～7 番町がほぼ同票、1 票差で上古町（古町通 1～4 番町）が多く、中高年では古町通 5～7 番町が最も多かった。このことより、古町通 5～7 番町には、幅広い年齢層の人物像を、印象としてもっている人が多いことがわかる。また、若者に分類された回答では、「古着」「おしゃれ」といった単語が共通していたのに対し、中高年に分類された回答では、ほとんど一致する単語、人物像は見られなかった。このことから、上古町（古町通 1～4 番町）には「服装に気を遣う若者」の印象があることに対し、古町通 5～7 番町には明確な印象、人物像がないのではないだろうかという仮説を立てた。設問 2 で、上古町（古町通 1～4 番町）、古町通 5～7 番町と回答したものごとに、共通する単語や人物像がないかを比較すると、上古町（古町通 1～4 番町）と回答したものは 4 つのうち 3 つに「古着」という単語が使われていたのに対し、古町通 5～7 番町と回答したものは、8 つのうち 4 つが「古着」という単語で共通していたが、それ以外は「おじさん」という回答や、「学生」といった回答が混じっていたりと、様々であることが分かった。
このことをまとめると、上古町（古町通 1～4 番町）には、「服装に気を遣う若者」といった人物像の印象が定まっており、町柄を表す要素があるのに対し、古町通 5～7 番町には定まった人物像がないこと、町柄を表す要素が、見つけられないことがわかった。

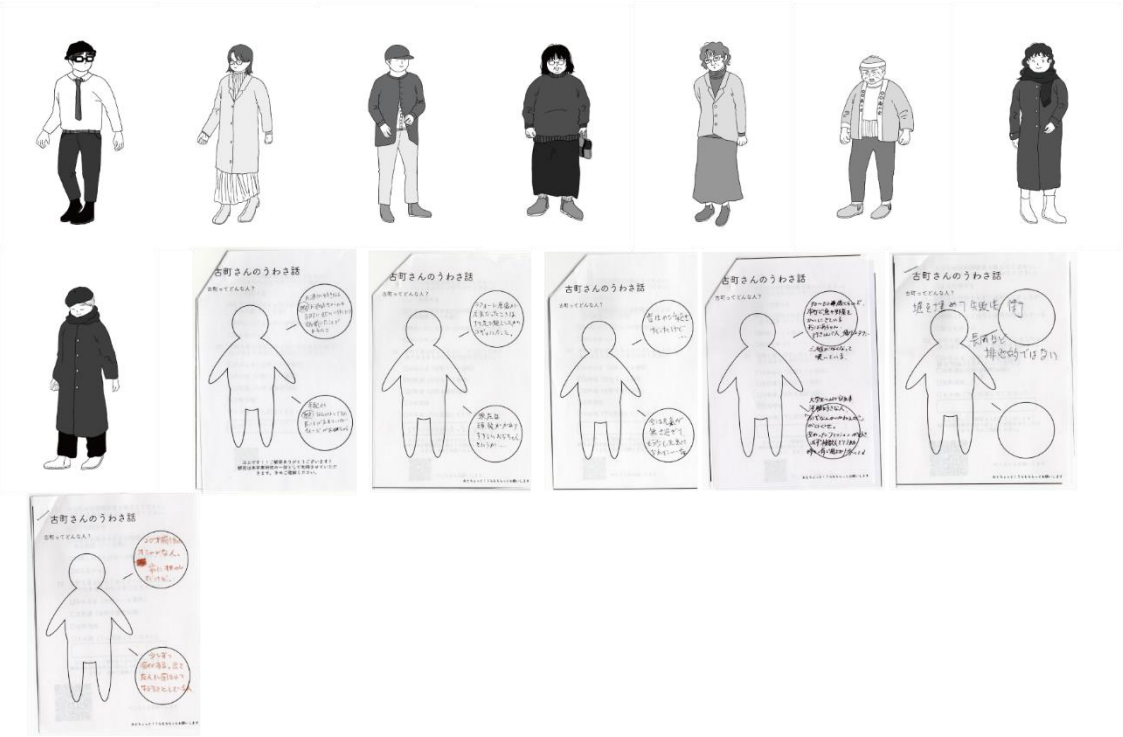
▷2　理想




（資料 26）【理想】回答一覧

【理想】に分類された回答で多くを占めるのは、前章の分類分けで「古風なおじさま」、「温故知新」として分類した回答である。これらで考察したことから、古町通の【理想】はどのような柄であるのかを考えていきたい。
前章での分類分けにて、2つのグループの回答より、町そのものに「古風」な魅力を感じている人が多いのではないかと仮説を立てた。別の言い方をすると、「古い文化がある町」である。このことは、前半、古町通の歴史の話をしたように、事実である。しかし、ここでは、文化があることが重要なのではなくて、文化があることがわかること、積み重ねた歴史が、文化として町に生きていて、それが感じられることが重要なのだと考える。だからこそ、特徴的な服装のおじさまが回答に出てきたし、「新しいこと」と「古いこと」が同時に記述された回答が出てきたのだろう。また、回答としては【偏見】に分類されたが、前章にて古町通に「リッチ」な印象を持つ人もいるのではないかという仮説をたてた。この印象は、この古風な服装をしたおじさまの回答からも読み取れることであると考える。
それでは、古風であったり、リッチである印象を与えるのは、どんな場であるのか。そもそも、「古町」という字面から、そういった印象を感じ取れるのかもしれないし、新潟市に古くからある、事実歴史ある町であるからこそ、にじみ出る魅力なのかもしれない。そういった潜在的な要素によるところも、もちろんあるであろうが、その元々の魅力をつぶさないための意識が必要である。つまり、「行ってがっかり」の町にならない努力が必要だ。やり方は様々であろうから、ここで限定的な手法を示すことはしないが、「古い文化がある町」「リッチな町」といった魅力を感じている人がいること、古町通には古町花街、及び商店街としての歴史があることを理解することは必須だろう。古い文化がある町では、町の形をかえてしまうような建物は好まれないし、リッチな町には、特別感がほしいであろうから、チェーン店は必要とされないし、似たお店が立ち並ぶことも望まれない。理解することで、避ける行動が出てくる。そういった意識をもつことが、望まれるだろう。

▷3　不満




（資料 27）【不満】回答一覧

【不満】に分類されたものは、マイナスイメージが記述された回答と、前章でも触れたが私が町を考える上で危険だなと判断した印象が記述された回答である。ここではマイナスイメージの記述を参照する。

はじめに回答に記述されたマイナスイメージには、次のようなものがあった。「観光スポットがない（おほりが残っていたら良かった）」「がんこで言うことときかない人」「三越がなくなって嘆いている」「今は元気が無さ過ぎて、もう少し元気になればいいなぁ」「堀を埋めて失敗した町」などである。まとめると、「元気がない」、「町に印象的なものがない」といったところであろうか。お堀に対して感情的な回答があることも印象的である。また、そのまま元気がない、マイナスイメージである、につながるとは言えないが、回答者にはそのような意図もあるのだろう、と予想できる記述として、「若い人があまりいないイメージがある」「頭髪がかなり涼しいおじちゃん」のイメージがある、といった記述も見られた。【不満】に分類できた回答では、【偏見】や【理想】より年配の人を想定した回答の割合が高く、中でも昔と比較し「元気や活気がない」ことの象徴のように、どちらかというとネガティブな感情の象徴として、年配の人を描いている回答が多い。しかし、設問 1 の回答の割合を比較してみると、設問 1 で「たまに利用するまたは利用したことがある」と回答した人が【偏見】では 10 個中 5 個、【理想】では 37 個中 17 個であるのに対し、【不満】では 11 個中 8 個と、かなり高いことが見えてくる。このことより、この【不満】で出てきたマイナスイメージは、古町通について詳しくない人、親しみのない人にとっての町の印象であることが分

かった。

## 第４部　まとめ

### 第１章　問題提起

前章にて、【偏見】に分類された回答から分かったことで、古町通 5～7 番町では町柄を表す要素が定まらないという点がある。つまり、町柄が弱いということだ。しかし、町柄調査実験にて、設問 2 で「古町通 5～7 番町」を選択した人は多く、複数回答を除いても 21 個と圧倒的であった。このことより、古町通の中でも古町通 5～7 番町を「古町と言えば」で思い立つ人が多いことがわかる。別の言い方をすれば、最も目立つ場であるともいえる。また、古町通 5～7 番町は、歴史の層が濃い範囲であるとも定義した。その古町通 5～7 番町の、町柄が弱いことは、古町通全体にとっても不利益ではなかろうか。
しかし、古町通 5～7 番町において、町柄が弱いと考える一方で、ある一つの役割があることにも気づいた。それが、町柄の中継地点としての役割である。実は古町通は、全国の中でもとても長い商店街であるという。それゆえか、通のなかでの町柄の変化が激しいのであろう、上古町（古町通 1～4 番町）と、古町通 8、9 番町では、町を歩いていても様子の違いが明確にわかる。その間をつなぎ、通の中の町柄をグラデーションにしているのが、古町通 5～7 番町であるのではないだろうか。よって、ここで問題となるのは、この 2 つの結果の矛盾である。人々の意識が集まりやすい、注目度が高い場であることが分かった一方、町の現状としては町柄が定まらず、2 つの町柄をグラデーションでつなぐ役割に落ち着いている状態にあるのが、古町通 5～7 番町である。この矛盾は、どうするべき問題なのであろうか。
今、古町通 5～7 番町は「動いている」時期であると考える。これは完全な私の体感であるが、この数年で新しい飲食店や公共施設ができるなど、ただ変化があるというだけでなく、「町が動いている」と、時代の中での転換期であるかのように、錯覚する変化があった。「にいがた 2 ㎞」なる新潟市の町づくり施策の「古町地区将来ビジョン」によると、古町通 5～7 番町は、7 番町周辺が「柾谷小路エリア」と「古町モールエリア」、5～7 番町全体は「古町モールエリア」に該当し、公共施設、各種イベントの場として整備・活性化することを目標としているようだ。この施策によれば、古町通 5～7 番町は、5, 6 番町と 7 番町で町柄を区切ることになるだろう。そうすれば、古町通 5～7 番町はそれぞれの町柄を確立して、矛盾はなくなるかもしれない。しかしそれでは、「古町通」という通の一体感もうすれてしまうのではと危惧する。これまで、中継地点であった古町通 5～7 番町が独立してしまえば、古町通は「古町通」ではなく「上古町」と、「古町通 5～6 番町」と、「古町通 7 番町」と、「古町通 8 番町」と、になってしまう。事実現在、それぞれの町づくりを行う団体は独立してあるというが、この場がすべて「古町通」であることは意識するべきだと考える。町の、

内部の人にとっては別物の町だとしても、すべてに古町通という名前が付き、1 本道でつながっている以上、ある程度の連携がなければ、それぞれの町のにぎわいにも、限界がでてくるのではなかろうか。

## 第 2 章　古町通の町柄

ここまで、古町通の町柄とは存在するのか、どのように考えて、調査したらみえてくるのか、そもそも町柄とは何であるのか、考え続けてきた。ここにきてもまだ、町柄とは私にとっても抽象的でつかめない概念である。しかし、調査をする中でみえてきた、前段落で提起した問題について、この町柄調査と、町柄という概念は、いかにして立ち向かうのか考えてみたい。本論ではこれを、「古町通の町柄」の 1 つとして、一旦の結論とする。
私はこの「古町通の町柄」の 1 つを、「リッチさ」として結論づける。これは、町柄調査実験の全回答より見えてきたこと、歴史を調べる中で見えてきたこと、2 つを包括した。町柄調査実験では、【理想】に回答を分類し、考察した際に同じ単語を用いた。もちろんそこで述べたことも含まれるが、この「リッチさ」とは何かと言えば、古さがあること、大衆的すぎないこと、こだわりがあること、1 つ 1 つの物事を大切に扱うような細やかさがあること、町柄調査実験にて出てきた全回答をひろえるのがこの単語だと考えた。また今回の実験では、子供の人物像がほとんど出てこなかった。学生であるとしても、成人した学生が主である。このことも、「リッチさ」を表すと言える。軽やかであったり、さわやかであるような場とは、少し違う味がする場であるのだ。同時に、歴史の層について、古町通内で濃淡をつけたが、古町通を 1 つにまとめて新潟市内で濃淡をつけたとき、古町通は層の濃い場である。その歴史のもつ重厚さも、この単語に集約できるであろう。大まかにこの「リッチであるか」を基準にするとき、各通り、団体ごとに違う動きをしたとしても、信念の通った、魅力的な場を作っていけるのではなかろうか。
この町柄を、古町通の町柄として、通り全体で共有するとき、企業がその企業イメージを共有することで、各ブランドごとでも一体感を出すように、古町通という 1 つの場が、ちぐはぐな場にならないことを願う。

## 第 3 章　結論及び町柄について

さて、ここまで古町通と、その町柄について考えてきたが、研究目的の 1 つ、「町柄」の定義づけと理論の確立、調査の方法論について、実験や考察を通してわかったことをまとめていきたい。
本論冒頭にて、町柄の定義づけを行った。実験を通して、町柄とは確かに「客観的事実、または周知の事実によって決定づけられた、その町の偏見、理想、不満を包括したもの」を調査することでみえてくるものであるとわかったが、「町柄」そのものの定義としては、これ

だけでは不十分であると判断し、ここでもう一度定義づけを行うこととする。
まず、町柄はどのような状況下にあるのか、条件をもつのかを以下にまとめた
1.“主観”であること　2.より多くの“主観”であること
3.ふんわりとした概念、輪郭であり、明確な“目的”や“理想形”を語ったものではないこと
4.多面的になれること
そもそも町柄とは、抽象的な概念であり、例えば町づくりの計画の際にたてるような、目的や目標、理想とする町の様子などを表すもの（人の集う場所を目指して、伝統的建築物が残る場所を目指して、等）ではなく、主観による場のテイストであると、実験の計画、実施、結果の考察を通して考えた。そしてその主観は、多くの人に共通し、かつ多面的になれる必要がある。受け取り方、使い方、感じ方が様々である一方で、1 つの信念として多くの人が共有できるものであってほしい。そうすることで確立されるものが「町柄」であり、これをもつ場が「町柄をもつ町」である。よって、町柄は、すべての町や場がもっているものではないだろうことも分かった。以上を総括し、町柄の定義は「より多くの主観と、潜在的な町の性質に基づいてまとめることができ、多方面に応用できる場のテイスト」とする。
よって、調査方法も、この理論や定義にのっとったものが望ましい。具体的には、「主観の調査」と、「潜在的な町の性質の調査」の 2 つを行う必要がある。「主観の調査」では、町柄調査実験が当てはまる。私の今回のやり方は、あくまでも調査方法を探る中で考えたやり方のうちの 1 つであるから、必ずしもこの調査が必要ではない。まだまだ調整する必要があるうえ、もっと適切な方法があったのではなかろうかと今でも思う。ただ、意識したこと、調査方法を考える上で必要だと判断したことは、回答の幅が広く、できるだけ自分の意思が入らないように注意する必要があること、の 2 点である。他人の主観を調査するわけであるから、できるだけ自分の主観が入らないよう、結果が調査の実施者のやり方によって限定的にならないように注意する必要がある。また、回答の幅が広いということも大体同じことを示すが、この幅とは、回答者からそれぞれの視点、考え方などを得られることを指す。本論では町柄調査実験としてビジュアルイメージでの回答を募ったが、この方法でよかった点としては文字による選択式のアンケートなどに比べ、実施者である私の主観が入りにくいこと、自由記述の側面があるため視点や捉え方、考え方が限定的にならなかったことなどである。この基本をおさえることができたため、意味のある実験となった。よって、この 2 点をおさえることが、主観の調査において重要な点であるとする。「潜在的な町の性質の調査」では、歴史の調査、まち歩きなどが当てはまり、本論冒頭でも述べた「客観的事実」の調査とほぼ同義である。本論では、古町通が古くからある町であったこともあり、歴史の調査は有効であったが、歴史を長く持たない場などでは適切でない場合もあるだろう。この調査では、「主観の調査」と組み合わせて町柄について有効な発見が得られることを目指す。よってそのために、「主観の調査」と並行しながら、調査の実施者が町についての造詣を深め、より適切な調査を探る、調整しつつ行うこととなるだろう。
本論では、抽象的で、曖昧な概念を追ってきた。しかし、町をみるとき、町に対して抱く、

自身の中で漂う感情や、感じている魅力を、どうにか大事にできる方法を探りたかった。そのため本論では、自身が好んでいた町、古町、その中でも古町通を扱った。今回、調査と実験、そして考察を通して、古町通のまちづくりに関して、問題提起を行うことができた。この研究を通して、その感情や魅力を町柄と称し、考察を行った、この一連の流れが、今回の問題提起にもつながったように、まちづくりやそれと関連した建築行為でも意識されるようになったら良い。

参考文献

1.にいがた街の記憶
2.港町新潟に伝承する文化・芸能の歴史的資料
3.新潟遊女考
4.新潟歴史双書 3　新潟歴史物語
5.明治のにいがた
6.新潟市史　通史編 1
7.新潟市史　通史編 2
8.新潟市史　通史編 3
9. 新潟市史　通史編 4
10. 新潟市史　通史編 5
11.新庄デジタルアーカイブ　全国遊郭番付
12.新潟市古町花街における街路及び敷地割の変遷－江戸後期から昭和初期を中心として-
13.花街を構成する建築物に関する分布の変遷－昭和初期から現在における新潟市中央区古町の三業を対象として－
14.新潟開港 150 周年記念資料集明治のにいがた－地図・写真－
15.明治・大正期の旧新潟町における花街の変遷－料理屋・待合及び貸座敷の集約に着目して－2020/2018
16.ふるさとの百年　新潟
17.新潟古町まちみなと情報館（ふるまち研究所 – 新潟・古町まちみなと情報館 (machiminato.jp)）
18.新潟市古町地区将来ビジョン（古町地区将来ビジョン　新潟市（niigata.lg.jp））
19.上古町商店街ホームページ（上古町の歴史（kamifuru.info））

最後に、本研究にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。